

僕らの持っている崇高な概念、愛とか、眞實、正義やという類たぐいのことだが、それらとて他諸々の概念と同様に、インパルスがニューロン軸索部のシナプス小胞に神経伝達物質の分泌を強い、受側にある隣のニューロンの樹状突起表層部、レセプター受容体へと間隙飛着せしめて細胞膜のナトリウム・イオン・チャネルを開き、細胞外からナトリウム・イオンを流入させ、カリウム・イオンの濃度が高く静止電位状態にあった細胞膜内を、外より高いナトリウム・イオン濃度にし、活動電位の状態へと電位差現象爲しめることであり、畢竟、なん奚ぞや、と糾されようと答えられない。

了解という情態が経緯きふんない唐突さで忽然と現象する。

イイリヤ・イヴィロンの双眸を見た者なら、そう思わずにいられない。リアルな紺碧、悲劇に似た燦めきが海を奏でる虹彩、彼女に恋した七歳の夏が忘れられない。

イイリヤは家族と隣家に住んでいた。

どこの国の人だったかすら分らない。当時まだ幼かった僕が知らないのは当然として、父や母さえ「そう言えは、記憶がないね。お隣にいらしたことは憶えているのだけれど」と言う。庭を並べて一年以上、挨拶を交わし、ときに談笑していた外国人一家の素性を、大人が知らずにいたなどと、あり得ることだろうか。いまさら考えてもしようがない。

確か、彼女は僕と同じ年だった筈だ。幼い少年にさえ息を吞ませた、眩い少女だったという尖嘶な記憶がある。大聖堂にある薔薇窓に嵌まったステンドグラスのように、蒼や青や碧や藍や紺の瑠璃がモザイク状に鏤ちりばめられた燦然たる晴ひとみがいまだ瞼裏けんりに鮮やかだ。

はじめて出会ったのは、僕が庭遊びをしているときだった。何をしていたかまでは思い出せない。

聞いたことのないメロディのハミングを耳にした僕が振り向くと、並宅でテラスの階段を芝庭へと降りる夏服の少女がいた。家と家との間には、成人の腰丈くらいの木柵が白く列するだけである。白柵に、貼りつくように寄って見入った。最終段を飛ぶように終えて接地するときに、髪が背中から肩へと跳ね上がる。

イイリヤの素足には、新芽のような指尖、柔らかさが香り匂っていた。生命の横溢を告げる滑らかな、真奥へゆくにしたがって透き徹る皮膚、その親指が立って人差し指との間の小股が切れ上がり、天に召された聖者のような恍惚へと僕を誘う。

エクスタシスだった。畏れるべき何者もなく、失われるものもない、一切が自分自身のように自在となった状態、あらゆるものに融通を感じる軽やかな、天空の昂揚感。幸福。

幼少時の僕は、時折これに襲われた。欲びは強烈で、いつも半ば無意識にこれを求めていたが、意識的には得られない。それをエクスタシスと呼んでいた。父の書齋に並んでいた書棚のうち、哲学書籍の分類の中から見つけた言葉である。七歳で意味は判からずとも、意を直感して命名する、僕は、そういう少年だった。

この恍惚自体を異常なことだったとは思わない。誰もが同じようなことをしている筈だ。程度の差こそあれ、人は皆、趣味やお気に入りの何かを以てエクスタシスを味わうことに相違ない。動物だって、すべて同様だと思う。餌を得たり、翼や四肢の筋肉を動かしたりするときの欲びがそれだ。いや、地衣類や、ウイルスに至るさえ、得ようと生きあがいているのではないか。どうして僕だけが例外でいられよう。

視線に気がつき、彼女が振り返った。

柵から退く。悪いことでもしていたかのように。意識すれば途端に、対象は他者となり、顧みる自分は恥ずるべき異物となる。思わず俯き、目を伏せずにいられなかった。

イイリヤが臆することなく近寄る。僕は、自らの罪を怖れる者のように萎縮した。

「おはよう！」

明るい声でよく響く。僕は、口の中でもこもこと応えた。

柵を両手でつかんで勢よく寄りかかり、彼女がこちらに見入るのを感じる。

「おはよう！」僕の返答が聞こえなかったのか、満面を微笑ませ、もう一度言った。いよいよ俯く。

イイリヤの鼻気が触れたような気がした。匂いのない馨しさが、耳や頬の皮膚に微暖となつてあたつてるように、僕を脈拍させる。

「やあ、君は」辛うじて言った。「日本語ができるんだ」

「あたりまえじゃない。わたしは、日本で生まれたのよ」

下を向いたままで、「知らなかったよ」と呟く。

「そうね。わたしもあなたを知らないわ。わたし、イイリヤ。あなたは？」

右足で地面を蹴った。

「僕は、いたる、だよ」

「何しているの？」

そう言われて自分が土を蹴っていることに気がつく。

「ミミズを探しているのさ」

でたらめを言った。

「ほんとう？ いるの？」

彼女が本気で興味を示す。自分でも赤面するのが分かった。じっとしてられない間の悪さが込み上げる。面を上げて、イイリヤの顔を見てしまった。

光に照らされたダイヤモンドのように燦めく彼女の眼。太陽よりも烈しく、射抜くような斬らかでありながら、その円形の紋章の中にはくつきり隈取られた文様が幾重にも奥行きを以て重なり、その完璧な円を見えない炎で縁取っている。

僕は、目を合わせていた。

「それで」彼女がゆつくり言った。「ミミズをどうするの？」

返答に窮する。「別に。暇だから捕まえるだけさ。僕の勝手だ」

「ねえ、海にいかない？」

関係のないことを言う。僕は、反射的に答えた。

「いやだよ」

イイリヤが、小首を傾げて僕の眼を見上げる。悪戯っぽく微笑みながら。

「どうして？」

また俯く。

「友達に見られたら恥ずかしいじゃないか」

「なぜ？」

そっぽを向いて、僕は、海岸のあるほうの空を見上げた。

「女の子と一緒になんて、かつこ悪い」

イイリヤが、眼を輝かせ、いっぱいに背を伸ばし、柵の間から身を乗り出す。

「そうなの？ でも、わたしは、外人だからいいじゃない」

最終的に僕は、押し切られてしまった。家の中に戻り、海に行くからと母に断る。独りで行くのと訊かれた。黙る。二歳下の妹、由伽もそこにいた。毛矢を耳たぶのところでカールさせた髪型、フリルのついた薄いピンクの服、鼻をむずむずとさせてから、「ゆかもゆく！」と言い切った。

僕は、頷かざるを得ない。

外で待っていたイイリヤを見ると、妹は、驚いたようだった。イイリヤは、ぱっと顔を明るくさせ、かわいい、と小さく叫んだ。僕は、口ごもりながら説明する。

「イイリヤだよ、由伽。隣に住んでいるんだ。僕は、いやだって言ったんだけど、彼女が
いこうって言うからゆくんだ」

「ふうん」

由伽は、まだ目を丸くしていた。イイリヤが少しかがみ、妹の頭を撫でながら、顔を覗き込むようにする。

「イイリヤよ。お兄ちゃんの友達なの。よろしくね」

由伽が頷いた。

「うん！ わたし、ゆか！ いっしょにいこう」

三人で出発、歩いて十分くらいの距離だ。

僕は、二人とは他人のように離れて前を歩いた。早く済ませてしまおうとするように。

イイリヤは、妹の手とつないで様々なことを話しかけながら、ゆっくりと来る。

けれど、崖の下り道までくると、僕らは、早足になった。駆け足になる。それがおかしかった。込み上げるものにまかせ、笑い出す。波の音に混ざって自分の奇声が松の岩壁に反響した。加速する。それが愉快だった。止まらない。穹^{そら}が廻った。体が浮く。飛んだ。

白浜の広い入り江に降り立つ。砂の上で倒れるように転げる。由伽の笑いが止まらない。僕だけが自分に戻った。二人を一瞥だけして、海へ走る。

イイリヤと由伽とが、砂を蹴り上げながら追いかけてきた。

意地悪な気持ちになる。波打ち際で止まらず、服を着たまま飛沫を上げて浅瀬に入った。胸下ぐらいの深さのところで振り返る。彼女たちは、ついて来られなかった。

「おにいちやあん！」 由伽が両手を後ろに引いて前かがみに顔を突き出し、訴える。イイリヤは、口を小さくあけて、眼をくりくりさせながら僕を見ていた。

けたたましく笑ってみせる。潮水をすくい上げ、彼女たちに向かって飛ばした。全然、届かない。叫んだ。

「ほうら、ここまで来てみなよ！」

「もう、おにいちやんったら、こっちおいでよ」 由伽がスカートをつまんで足をじたばたさせる。イイリヤは、それを見て、強く僕の妹を抱きしめた。

「いたるっ！」 僕に向かって大声で言う。「由伽ちゃんの言うこと、聴いてあげなさあいっ。お兄さんでしょう！ 皆で遊びましょうよ！」

「いやだねっ」

「おにいちやんっ！」

「どうしてっ、いたるっ！」

「いやだったら、いやなんだ。一緒に遊びたけりや、ここまで来な！」

そう言いながら気分は既に客観的になり始めていた。面倒臭くなり、潮時を探っている自分が分かっている。

「あなたって、ほんとうにいいわるっ！」そう言った後のイイリヤの眼が微笑んでいた。

僕は、情性で悪態を吐く。

「そうさ、悪かったねっ！」

「もうっ！　いたるつたらあ。

こんなことぐらい、わたしにできないって、本気で思っているのっ！」

僕は、ちよつと動揺するが、強がる。

「来られるものなら、来てしろよ！」

イイリヤが髪を振り笑いながら黄色い声を上げた。まるで、ぞくぞくする歓びに身悶えているようだった。言う。

「もちろんよ！　できるわ！」

言う、思いつきり駆け足で海に飛び込んできた。僕は、一歩寄る。

「イイリヤ、気をつけて！」

飛沫を上げて来た彼女が、僕の手前で波の抵抗に絡められ、緩んだ水底の砂地に足をとられる。

「あぶないっ」

僕は、手を差し出した。倒れかけたイイリヤの両手が、僕の二の腕をつかむ。僕の両手は、彼女の腋の下に入る。瞬時よろめいたものの、どうにか堪えて波に揺すられながら、イイリヤを支えた。二人を波が幾度も傾がせる。彼女の顔にかかる。髪が、額や頬や首に貼りついた。

転んで海に浸かりそうになったイイリヤは、驚くでも怖れるでもなく、まっすぐ僕の眼を見つめ、双眸を生き生きさせながら、唇に笑みを含ませている。僕の手にかかい、暖かい、腋下の皮膚の感触があった。

僕は、匂いのように繊細な触感に恋をした。

帰り道の夕べ、黄昏が豊旗雲を炎に変えて西の岬へと没してゆく。岬は漆黒に近い暗緑色になっている。

海崖の頂上近くで、僕は、止まって見ていた。

茜色と陰翳とを鮮やかに浮き上がらせる東の岬までは一〇kmの距離があり、それが入り

江の間口の幅であって、向こうには海原が深い黄金色に染まり、小波の無数の瞬きをちらつかせる。からすの声と波の音とだけであった。

真夏の陽射しで服はすっかり乾いていたが、よれよれだ。

僕の胸に鬱勃と、絵本で観た光景が泛かび上がる。イーリアス、トロイ戦争の話だ。

「きれいなね」

イーリヤが言った。妹が目を瞠みひらいて頷く。

「うん」

黙っていた。

何も感じていなかったからではない。

イーリヤがまたハミングし出した。どこか哀しくて優しい、崇高さがある。テラスから庭へ降りるときに聴いたものと同じ調べだ。後にその題名を知る。アヴェ・マリアという賛美歌だった。

深い感情に捉われ始める。

僕は、イーリヤ横顔を見た。

彼女の眸の様々な蒼が移ろいつつ、夕日に映えて繊細なグラデーションを浮かべている。何が言いたいのか解らぬまま、彼女の名を呼んだ。

「イーリヤ・・・」

彼女がゆっくりと顧みる。僕を。

イーリヤの眼差しの海、無数に異なる蒼、青、碧、紺、藍の燦めきが境界もなく絡み、破綻し、ハルモニアを奏で、啓示にも似た意味概念の力で僕を襲った。暴虐とささ言える

force

イデア

力が、諸概念の本質それ自身にかかわりなく、何ら経緯もなく、忽然と『意義』として実存

イデア

するのを目のあたりにする。意義を為す本質は実在ではなく、了解の気分を起こさせる絡繰りがあるのみであった。

情態を為らしめ、諸行為を欲求させることを目的とした、諸々の便宜であって、理などない。僕らは、これら諸概念の中を、内部的に生きている。この世界の一切の事物、想像物も、見える聞こえる味わえる嗅ぎ取れる感じられる限りのすべては、固有性・特定性の根拠を持たなかった。無という概念にすら当該しない。無をも含めありとあらゆるかたちの、それぞれに異なる無限数の人生全部を、誰しもが同時に生きているのだと言えた。

かたじけなく

すなわち、僕は、螺鈿で象られた般若波羅蜜多心經二百五十六文字だった。王宮の円柱に絡みつく龍神のように、太陽の縁を囲むフレアーのように、光燦の雪崩れる瀑布だった。

天穹に聳える尖塔の背後に黄金に燃える雲、一切を切り裂く霹靂だった。場末の酒場の卓上に置き忘れられ、差し込む昼日のあたる欹けたガラスコップ。

僕は、古代の戦士だった。

激烈な雨の降る中、装甲された六頭立ての搬送用大型馬車に載せられ、暗鬱な、未知なる戦地へと赴く。穹はどす黒く、馬はチャンフロンと呼ばれる金属製の顔あてが附され、時折り嘶き緊迫を裂く以外、非情なマシンのようであった。

これがいま三人のたたずむ海辺の断崖の、夕景の状況であって何ら不思議があるうか。

僕は、殺伐たる眼差しでスキアヴォーナ（籠状のナックル・ガードが附いたブロード・ソード）を抱くようにして膝を立てている。各戦士らの持つ長剣やフランキスカ（投擲戦斧）、フレイル（穀物を繋いだ棒状の武器）やメイス（鎚矛）なども同様に無表情で虐戮に満ちていた。馬車の鎧扉の隙間から雨を眺めている。出発前の朝食は山羊のチーズと香辛料入りの温かい葡萄酒だった。最後の食事だったかもしれない。だが、僕の心は、何も感じず、ただ、雨の風景を目で追う。

ただ、雨を。

「いたる」イイリヤが呼ぶ。剥ぎ取られるように、僕は、夕景の海崖に連れ戻された。

「いかないでっ。待ってっ」切迫した眼差し。衝撃だった。僕が瞬間的に逝った、異なる現象世界での心情が彼女に知られている。

共感。どれだけの人たちが言葉のほんとうの意味を理解しているだろう。それを感じ、それを知る人は、必ずや奥深い情感に貫かれるに違いない。

千年の時を経て甦る恋のように。

翌日から、僕は、イイリヤと会えなくなっていた。堪えられなかったからだ。例えば、もうそれ以上のないものは、あとは崩れ滅び喪われてゆくしかない。だが、逆に、いや、それだからこそと言うべきか、執著が強烈になる。うまくいつているものをさえ、敢えて破壊してしまうくらいに。

無論、七歳でそのように明瞭に意識していたわけではない。ただ、心は状況を察していた。晰らかにそう記憶している。

そんなこととは知らぬ彼女が妹に会う度に、どうしていたるは出てこないのかと訊いていると伝え聞くと、自分が忘れられていないことに安堵を覚えつつ、かえって畏れ、いよいよ尻込みし、出て行く気持ちにはなれなくなっていくた。

七月が終わる。八月に入ると、夏休み中の登校日があった。イイリヤは街の私立学校に行っていたので、会う心配も期待も持ち得なかった。寂しさで、友達と教室にいてもうわの空だった。

その頃は既にイイリヤがどうしているのか全然分からなくなっていた。由伽が僕に何も教えなくなっていたからだ。会ってはいるようであったが。寂寥を募らせる。

屈託ない性格のイイリヤが、会わない僕を忘れるも当然と思いながら、認めたくないがゆえに彼女が僕に会いたがっているかと繰り返し想像し、そのくせ好んでその反対の状況を考え、彼女を恨む気持ちにさえなっていた。勝手だったとは思うが、それが事実だ。

蒼穹を眺めて過ごし、暮れると母から食事に呼ばれ、テレビを見、眠る。真夏の日々が経過する。

或る日、見た。

曇天に丘陵の草々が強くなびく、唸る疾風の中、白柵につかまって、僕のいる二階の窓を見上げるイイリヤを。彼女には、僕が見えていないようだった。心臓を射抜かれたように感じた。哀しげに訴える眼。

僕は、タオルケットをかぶり、ベッドに隠れた。シーツに額をこすりつけ、固く瞼を閉じた。彼女が無理やりこの部屋に飛び込んで来てくれればいいんだ、そう思いながら。

その日の夕方、隣家で諍う声と物音とが聞こえた。

僕ら家族が楓材の食卓を囲んでいるときだ。父は帰宅していなかったので、母と由伽との三人だった。僕は、驚いて音のした方の壁と窓ガラスとへ頭を向ける。

妹が言った。

「またけんかしているね、おかあさん」

母がやさしく窘める。

「由伽。よそのお家のことをそんな風に言っっては、いけないのよ。私たち外の人とやかく言っではいけません。母さんや由伽は、どういう事情があったのか知らないのだから。

理由も分からず、あれやこれやを言っっては、だめなのよ」

由伽がフオークに巻いたボローニヤ風。パスタを皿にぽとぽと落としながら、返事をする。

「はい」

僕は、イイリヤのことが気になった。

「またけんかしているって、前にもこんなことがあったの？」

「いたる、おかあさんが由伽に言ったことを聴いていた？」

「おにいちちゃんったら、知らないの？　もうまえからだよ」

「由伽！」母が言った。僕は、動揺し、母の制止などでは止められない。

「前からって、いつぐらいから」

「よしなさい。いたる」

「このまえ、おにいちちゃんが学校にいったときくらいからだよ」

全然、知らなかった。そんなに前からだなんて。

「イイリヤは、どうしているかな、由伽」

妹が、頬を膨らませ、唇を尖らせる。

「おにいちちゃん、自分がゆかないくせに、なんできくの？　どうしてイイリヤちゃんと遊んであげないの？　おにいちちゃんのこと、しんばいしていたよ、ずっと」

「関係ないさ」

イイリヤは何も悪くないのに僕から無視され、おまけに両親まで仲違いしている。だから、僕の部屋の窓を眺めていたのだ。堪らない気持ち。イイリヤに会いたい。

それでも数日、僕は、同じような日々を焦燥しながらやり過ごすのみであった。

八月の末。眠りから覚めると、朝、傲然と降り頻る雨だった。

鬱悶と過ごした夏休みが終わろうとしている。僕は、鬱々と児童文庫の厚い扉を開く。

モンテ・クリスト伯、エドモン・ダンテスの物語、陥れられた彼が牢獄の中でフィアンセを思い、やり切れなく駆られる場面の頁だった。閉じる。見たくなかった。

隣の家で烈しく扉を閉める音が僕の部屋の窓を空気で叩く。イイリヤの父親のジャガーが砂利を蹴り、急発進する音。エグゾースト・ノートが遠さかる。その後は、雨音以外、静寂。

僕は、動けなかった。そして、予感に怯え惧れつつ、窓に顔をつける。

胸を抉る光景、的中してしまった。

土砂降りの中を、イイリヤが木柵の前にたたずんでいる。また両親の諍いが起こり、父の方が家を出たのだ。彼女は争いの場にいられず、部屋を飛び出したに違いない。

眼が僕の部屋の窓を向いて訴えていた。殉教者のようなその姿。ブラウスは浸り、皮膚を透かせて貼りつき、燦爛たる金髪が肩に濡れそぼり垂れる。

僕の心は篡奪された。

階段を駆け下りている自分に驚く。一刹那、躊躇が過ぎよったが、衝動は止められなかった。庭に飛び出す。

「いたるっ！」

イイリヤが信じられないという表情で睜き叫ぶ。

「どうして、イイリヤ……」

彼女は唇を結んで黙ってしまった。訴えたいが、言いたくないのだ。

僕を見つめる晴。下瞼を堰のように濫れさせている。涙の移ろい、哀しみを湛えながら凜とした燦めきがあり、僕に言葉を言わせない。「イイリヤ……」しばらくの間を置いて、吐息のようにもう一度、言った。

応えない。

僕も動けない。烈雨が叩く。

眼の碧さは虹彩という、瞳孔を調整する筋肉の一種の色素が少ないせいで、青い光線が吸収されないまま亂反射し、生じる。

イイリヤの虹彩の亂反射が捉えられぬまでに眩い。虹彩を蔽う角膜と、角膜と虹彩との間の前眼房を満たす眼房水とが、尋常ならざる晰らかさを持つ。

その透明度は、湖面から水深一〇〇mの底にある砂粒のひとつひとつが表面の凹凸の一二々を、精緻な解析度で、目眩させるほど明晰にする水。

煥り為す青碧。蒼燐が紺碧に燦々と爛めく。碧蒼なる燐火の如く炮烙し、奥になるにつれ炳焉かとなるその奥に、煥せる青蒼を赫奕と太陽の如き燎らかさで燦かせる。

言い表す言葉を一つしか知らない。眞實。僕らが呼び倣わすそのの、露呈した姿だった。人間は一秒たりとも呼吸することができない、高純度の鮮烈な空気。僕は、イイリヤの虹彩の尖熾に射抜かれた。

空前の眞實が僕を襲う。

忽然と廢墟が現象した。アクロポリスの岩丘の上に聳えるバルテノン神殿、投げ出されたように、僕は、そこにいた。

処女神像があつたと思われる跡が目の前だ。

紺碧の蒼穹、正午。

奇跡が起ころうとしていた。遙か古代に失われた巨像が、粉々に散った象牙製の皮膚や黄金製の衣装を空気中から回収し、植物のように足下からかたちを為す。僕の十数m尖で女神アテナ・バルテノス像が甦ろうとしていた。

槍や楯、戦兜、手に載せた勝利のニケ女神などが姿を現し、アテナの眼差しに生氣が宿って、終には強烈な神々しさを放つ。

既に彫像ではなく、現に実在する神であった。

復活した女神がシンバルの響きを持つ笑いを笑う。イスラム建築の内壁面を覆い尽くす緻密な漆喰細工のような光燦を持った、黄金の哄笑を。その笑声に比べて、人間はいかに惨めな者か。

僕らは、生存に執著せずにいられない。細胞の塊にすぎない。化学反応に因って起こった成果、その都度その都度の因子によって構築される科学的な現象に他ならない。

僕らが望み、考え、努め、いかな忍従しようと、この事実からは逃れられない。どんなに正義に貫かれ、崇高な精神を以て自らをさえ犠牲にしようと、純潔の誓い、眞實の愛に基つき死をも恐れぬとも、ここからは一歩たりとも出られない。

僕らにとつて、生存こそが世界の一切であり、見るもの、聞くもの、行為、心情、思い考えることのすべてがそれ以外であり得ることは絶対でない。

網膜の中央窩で受けたストレスを原因として脳神経細胞を走るスパイク、鼻腔の粘膜に繊毛を揺らす感覚細胞が捉えた刺激、鼓膜の振動がリンパ液に伝わって波動へと変じる、僕らは、これらの集積なのだ。科学的な絡繰りの上に発火した刹那的な現象の連続、それがあたかも一個の、一貫した、『自己同一性』という名の蜃気楼と見做されているにすぎない。

この細胞の牢獄の中でしか人生は顕われようもなく、その構造のとおり現象する以外あり得ようがない。その構造とは、生存だ。諸々の概念の力は、ありとあらゆる欲望や、怖れや嫉妬、怒りや哀しみ、愛情や義憤、楽しみ、餓えや渇きや寒さや痛みや苦しみ等を製造し、僕らの情態を為し、駆り立て焦がれさせ、望み求め、生き延びたいという衝動を構築し、これを以て鞭打つ。諸概念をして合理に至ろうなどとは、狂愚に等しい。

僕の目前に現象した、知恵と戦いと的女神、アテナ・パルテノスも、その便宜の一つだ。現にそのとき僕は、幼いながらも切望した。彼女を観て、そう衝動せずにいられようか。あのように崇敬を抱かせ、眩く、偉大なる者への憧憬を抑えることなどできなかった。

諸概念は便宜にすぎない。有機物の化学反応という科学的な現象が物理的に在るだけだ。POKE力である諸概念が固有化・特定化し、意味を為して意義を感じさせ、現実性を以て迫る

うとも、それゆえにこそそれが経緯なく忽然と現れたことを露呈する。なぜなら、それは嘶らかに理ではなく、力だからだ。POKEそれが実際何であるか、どうしてそうでなければならなかったのかという答がどこにも見出せない。突き詰めて問い質せば、結局、それはそれである、それはそうあるのだ、としか言いようがなくなるからだ。

イイリヤの双眸によつてこの眞實に晒され、諸概念の固有性・特定性の神話が崩壊する。彼女と向かい合っている庭がトレド大聖堂にあるトランスパレンテの細緻な装飾でないという根拠はあり得ない。フェラーリ512BBの十二気筒ボクサー・エンジンだった。

イシュトヴァーン一世の大理石像の上を覆うドームの鼓胴に並ぶ聖なる文字、ベルス家の令嬢ソフィアの唇、装甲戦闘車輛メルカバ Mk 3 Baz に附くモジュラー式装甲、仁和寺旧藏摩訶般若波羅蜜多心經写本に使用された雑体筆法「垂露」と「龍爪」とに相違ない。アッピア街道を行く使徒が問うた言葉、「クオ・ワデイス・ドミネ？」であつた。

現にこれこそがヴィーナスフォートの擬似イタリア旧市街、此れと彼れとは異ならず、しこ而して同じくあらず。

涯のない狂乱の氾濫する祭儀がエクスタシスに達した。過剰なる無際限の自由自在、屍。眞實を生きたことなど不可能なのだ。僕の笑いが僕を裂き砕き尽くす。

実際、白い柵は雨に打たれ、濡れていた。ペンキの油分が水分をはじいて滴にする。雫となつて塗料に埋められた板目の凹凸に沿い、不規則に曲折しつつ、墜ちる。それが北緯二七度にある エル・パツハロ・デル・マル海鳥島 マル・メデイセラ という名の島だからだ。つまり、裂南北大陸海の中央にあるコリーダ・デ・トロス諸島の南端から数えて第五番目。広がる海と蒼穹、悠々と流れる雲。眩い砂。

そこにあつたのは、いたるいそとイ多し・イ月リという名、首根の左から始まり、顔面の左部分全面を覆いながら、後頭部左側にまで続く青龍の刺青。

彫つたのは、両親が殺されてからだ。三年前、まだ十一歳のときだった。財産の一部を処分し、五人の彫師を雇つて二週間で済ませた。怒りと憎悪と悲痛との炎に苛まれていた僕は、その間、合計で十一時間しか眠らなかつた。

まっとうな理由なんかいない。

僕らスベタニア人に刺青の風習はなかつた。島の先住民族、アリアノ人の習慣だ。ならば、なぜにと言われれば、両親を直接的に殺したのが、アリアノ民族主義過激派だったからだと答える。斯くも激烈な刺青は、アリアノ人の中にさえ皆無だった。彼らとて、腕や胸部、背中や脚、頬の部分等に施すだけである。喉から顔、頭部の左すべてを覆わせる奴はどこにもいなかった。

蒼く彫り上げられた龍は、左鎖骨の上に かがや赫く赤口を開き、長い首を喉仏左側にくねらせ、前脚を顎左に広げる。胴体が鱗を光らせて左頬を渡り、左目蓋を跨いで額左に後脚を泳がせる。尾が左後頭部に雷霆の如くにのたうち、頭髮左半分を剃らずしてはこれを果せなか

った。

島の中に親戚姻戚者を持たず、諫言する者となかったが、知人や近隣者皆が驚愕し、友人らは話しかける者が激減した。街に出ても人々が目を見張り呆れ、視線を背けて後に振り返る。

同族のスベタニア人はもちろんのこと、どの民族も眉を顰め、肩をすくめた。アリアノ人たちが、貧民窟の路地陰から奇異の眼差しを向けて、判断し兼ねる表情をするのが常だ。それでよかった。誰にも分かってもらいたくない。誰にも気持ちに触れて欲しくない。そして、復讐を誓いはしなかった。

「だがよ、イ多」

叭羅蜜多・斑若ばんにやが言う。人參色の短い髪を寝癖で四方八方に突き立てたスベタニア人

で、僕の妹ユーカを除けば、信じられる唯一の人間だった。

「何だよ、急に」僕は、隣を見ずに言う。

彼が尖った顎をしゃくる動きを感じた。

「俺は、行くぜ」「どこへ？」僕は、世界を北と南とに引き裂く青碧の海を眺めている。

彼が訝しげに眉を寄せ、右隣の僕に顔を向けるのが分かった。

「無論、北大陸ノルデだ。ユヴィンゴさ」

僕もまた左隣に坐る彼の顔を見る。同時に左方遙か連なる海の向こう、北の大陸の方角を望んだ。僕らは島の東岸にいる。逆に右手数千km尖には南大陸スーがあった。敢えて、僕は、彼を糾す。「なぜ」

叭羅蜜多が鼻を鳴らし、目を細めて言った。

「分かっているだろう。ユヴィンゴ連邦のスベタニスタ自治州はいま滾っている。革命の気運が労働者の間で鬱屈している。数カ月後には何が起こっても不思議はない。

だからさ」

同地は住民の七〇％近くがスベタニア人だ。もともとは僕らの祖先の王国があった土地で、五百年前のコルバの戦いで敗れ、国家は滅び、ユヴィンゴ王国の領有となった。

敗戦以来、民族の多くが南と北との両大陸各地に移民として渡っている。僕の曾祖父もその一人で、一族は北大陸の各地を転々とした。父は母を娶って一族から別れ、この島に來たのである。僕とユーカとは、ここで生まれた。

僕ら民族に辛酸を舐めさせたユヴィンゴ王国もまた十一年前に、北大陸の八割を領土とする超大国、神聖シルヴィエ帝国の軍事介入によって滅びている。

齊曆二七一年、ユヴィンゴ王国内各地で労働者による革命が勃発した。王権が揺れたそのとき、隣国の友誼を大義として軍隊を派遣したシルヴィエが、そのまま王朝も革命も潰し、建前だけの国民会議を招聘して、「民意に基づく」連邦政府を立てたためだ。スベタニスタはこの機を以て自治州の地位を勝ち得たのだが、シルヴィエの傀儡政権下で事情は以前とさして変わらず、再び各地で革命の気運が立ち籠り始めていると言う。

だが、今度の敵は一万や二万の兵で構成された小王国の軍隊ではない。三百万の戦士を有し、先鋭科学兵器を装備する、世界最強の神聖シルヴィエ軍なのだ。

僕は、再び東の水平線を遠望する。

「悪いが叭羅蜜多、君は、本当に民衆の革命を信じられるのか。君らの家族を殺したのも民衆じゃないか。あの大虐殺の日を忘れたのか」

彼が僕に向き直った。下瞼に苦悶を浮かべ、

「忘れやしないさ。忘れられるわけがない。」

あの七年前の朝は。俺は、六歳だった。お袋がごみ捨ての桶に入れてくれて助かったんだ」

僕は、思わずここぞとばかりに継ぐ。

「無論、君が忘れられる筈ない。」

龍神信仰（アリアノ人の宗教）の原理主義過激派が煽動して、難民キャンプのスベタニア人家族数百人を虐殺した。

アリアノ人たちが、スベタニア人を憎む理由はひとつだ。十一年前に南大陸系のスベタニア人傭兵が罪のない数千人のアリアノ人家族を殺戮したからだ」

かつてこの島は、ユヴィンゴ王国（当時はまだ連邦ではなかった）の監督府が置かれ、王の直轄支配領であった。その時代が百数十年余り続いていた。だが、齊曆二七一年の革命によって北大陸の本国が揺らぐと、虎視眈々狙っていた南大陸スールの豪族パスタリヤ家を中心とする羅豆らてのノ人らが急襲し、島を占領したのである。

そのとき伴われて上陸したのが、南大陸に移民として生きていた南系スベタニア人らによる傭兵部隊であった。彼らは、民族の自立を認めるというパスタリヤ家の言葉を大義として、自分らの勢力拡大を野心し、スベタニア民族主義過激派を中心にして、残虐の限りを尽くし、ユヴィンゴ勢力を駆逐すると、今度は旧監督府下で活動していた一部のアリアノ人を炙り出すために、女性や幼児さえ分け隔てることなく、虐殺を執行したのである。その数は五千とも言われるが、詳細はまったく明らかになっていない。

アリアノらの怨嗟は筆舌に尽くせぬものであった。

「叭羅蜜多、その影響で、数年後に罪のない君ら北大陸系のスベタニア人らが、アリアノ人の報復を受け、殺された。君らは、北大陸のイルーダ王国から来た。

南大陸との関係はない。イルーダがシルヴィエに占領され、迫害から逃れてきた難民だった。傭兵ではない。どうして殺される？ 同じ民族というだけで復讐されたのだ。

いったい、同じ民族なら皆が同じなのか。

どんな宗教にも過激な原理主義者はいる。だけど、原理主義の全てが過激派ではない。スベタニア人にも狂信的な民族主義者はいる。けれど、民族主義全てが狂信なのではない。当然だ。

いったい、誰が悪かったのか。遣^{つか}ったバスタリヤ家か。これを利用した狂信的民族主義者か。恨みを龍神教の聖なる義務となし、同じく無差別虐戮を繰り返すアリアノ人らか。僕らスベタニア人も民族単位で捉えれば、歴史上、様々な理由で残虐行為を行ってきた。各地で。だからと言ってそのために、全てのスベタニア人に死を以て贖わなければならないような罪があるわけじゃない。あたりまえなことだ。

だが、その明晰な事実を認めようとしてもしない。事実には照らして見ようとしなない。そして、民衆だと名乗っている」

強く結ばれていた叭羅蜜多の口元が歪んだ。目尻に一本の皺が走る。

「俺がそのぐらい、考えないとでも思うのか。だが、それは所詮、泣き言だ。俺たちは、この世界から逃れられない。何かを為し、闘ってゆくしかない。分かっている、だ。

ならば、イ多し、おまえは、もし妹のユーカが襲われたとき、相手に応戦しないというのか。できないだろう？ 自分だけの苦しみならば、勇気ある者は堪えるだろう。だが、それが愛する者なら、どうだ？

堪えられる理由がない。

解るだろう。生きることが常に選択を強いる。窮極の選択を迫られたとき、人間は選ぶしかないのだ。人間なら、どちらかに与して闘う以外にあり得ないのだ」

「分かっているよ、叭羅蜜多。それでは、同じ不幸の繰り返しだ。

残酷な言い方かもしれないが、人間は自分や愛する者、他者より自分に近い者、自分のアイデンティティである国家、自分の信奉する宗教、それらが突然に奪われ、惨殺され、破壊粉碎され、蹂躪されるときに限り、恨み、憎しみ、復讐に走る。つまり、自分自身の一部とも言えるものが損なわれることを赦せない。逆にそれらすべてが万全で、安定した

平和のうちに飽くことがなく充足できるのなら、幸福とを感じる。

叭羅蜜多、これをどう考える。非情な思想かもしれないが、敢えて学問的に割り切って言わせてもらえば、畢竟、人間は、自分の望みや意向が融通する状態を求めているにすぎない。そう言えないか？

そう、もつと図式的に表現すれば、人間はすべての抵抗がない自在の状態を欲している。それがほんとうの欣求だ。その執著に駆り立てられ、それを為し、遂げようとしている。意のままなる、一切が遂げ終わった状態を、幸福を、だ。

だったら、報復を超えて、互いに諍うことのない、さまざま罣礙のない、平等に幸福になれて、争う余地のない真の平和を目指すことが、憎悪と怨嗟との動機の、根源的な本意に沿うんじゃないのか」

叭羅蜜多が紅潮する。

「イ多し、おまえは、そんなばかな屁理屈を、俺たちのように家族を虐殺された人々の前で、ほんとうに言えるのか。信じられない。第一、皆が均しく幸福になれるなんてことがあり得ると、本気で思っているのか。そうさ、イ多し、おまえの言い方はあまりと言えばあまりだ。

もしもそれが分らないと言うならば、俺は、おまえの論理においておまえに反論する。イ多し、抵抗性のない状態を求めるなんて、自己矛盾だ。

抵抗性があるから、俺たちは感じられる。感じられなければ、見えない、聞こえない、考えられない、望むこともできない、何ひとつ為すこともできない。諸概念があり得るのは、ヴァイダーシ ユテンデイヒカイト抵抗性ストレスが、つまりは、意識があるからだ。

すべてあるものは、抵抗性によって諸々の概念なんだ。存在であり得るのだ。抵抗性が感受であり、あらゆるものへの理解であり、存在なんだ。あたりまえのことじゃないか。抵抗性があるから、『何か』であり得るんだ。違うか？

確かに、あらゆる生き物は、抵抗性のない状態を、自在を求めているのかもしれない。だが、それは自家撞着する。手に入れるってことは、『何か』を把握するっていうことに他ならない。『何か』がない状態なんて要するに、意識のない状態だ、屍骸同然じゃないか。その要請は、前提条件からして、既に破綻している。

イ多し、生きるってことは、諍うってことだ。どこかに与して争い続ける以外の生き方がないんだ」

僕は、黙った。叭羅蜜多も黙る。

確かに彼の言うとおりだ。ただ、それでは、永遠に抜け出せない迷宮ではないか。同じ道を何度も走らせる絡繰りのようではないか。

「こんなことはあまり言いたくないがな、イ多し。

おまえは、総督府に雇われていた父親を、同族である南系スベタニアの連中から裏切り者喚わりされ、北系スベタニアも怖れて見て見ぬ振り、まったく救う者のない状態の中で、ユヴィンゴ支配時代から総督府に恨みを持ち続けていた民族主義過激派のアリアノ人らに、母親とともにリンチされ、殺されたからだ。

だから、誰も信じられない、それが心底の根拠だ」

父は、ユヴィンゴ王国領有時代の旧総督府に勤め、当時から既に潜入していた南系スベタニア人のスパイ活動に対する諜報活動を行っていた。移民には汚い仕事しか回ってこない。父は、何人も処刑台へと導き、実質的な地位を上げた。旧総督府が転覆した瞬間に、彼の運命は決まっていた。

数年の投獄と拷問。意図的な釈放。その日のうちに、迎えに行った母とともにアリアノ人過激派らに殺された。

僕と妹とは、幼いがゆえに、命と生きるための幾許かの財産所有とを赦され、今日に至っている。

「別に、俺は、おまえを責めているわけじゃない、イ多し。誰もが人間的な動機を持っている。それはもう、仕方がない。そういうものなんだ。超えられないことなんだ。だから、俺は、言う、どこかに与して戦うのは、やむ得ない、と。

おまえだって、俺と同じ北系スベタニアだ。スベタニスタを助けようという思いを無為とは、言えない筈だ」

「叭羅蜜多。確かに君の言う、そのとおりかもしれない。現実主義的にはね。だが、そうであっても、僕が言っていることは、それ自体で義しい。僕が言う方が、ほんとうの意味での、実践的現実主義だ。

君の論には、何の解決も未来もない」

叭羅蜜多が抱えていた膝を放ち、半身を乗り出す。

「分かっているのは、おまえさ、イ多し。

おまえの言うことは、理屈として義しいかもしれない。だが、何にもならない。いいか、そんなものは平和に生きられる人間の御託だ。

俺が喩えて言ったように、自分の家族が殺されようとしたなら、おまえだって剣を持ち、

どちらかへつかねばなくなる筈だ。いや、絶対にそうだ。

俺は、おまえが俺より平和に生きてきたとは言わない。むしろ、おまえの現状は俺より厳しい。どこにも行き場がないからだ。だから、おまえは、ニヒリズムに堕ちているんだ。その事実を事実として見据えた方がいい。

イ多し、おまえが言いたいことは、俺にも解る。だが、それを言っていられないのが、現実を生きる人間の現況なんだ」

僕は、またも黙り込んでしまった。波の音だけがする。

「帰ろう、叭羅蜜多。せつかくの休日だ。もつと、気分転換しようよ。」

どうせ、君は行ってしまうんだ。出発は、いつ？」

彼が少し笑顔を作る。

「一カ月後。来月の今頃かな。何しろ、俺らが渡航するには、いろいろと技術的な問題があるから」

そのとおりだ。本来なら出国を許される筈がない。全ての過激派の行動にはバスタリヤ家の監視がついているし、受け入れ国側も判っていれば下船させないだろう。

スベル教原理主義過激派『自由の聖なる海鷲』、彼の属する組織だ。

北系で構成され、反政府活動を行っている。ただし、一部異端を除けば、アリアノ人に対する特別の敵意は持たぬ組織だった。それに満たされず、焦燥する叭羅蜜多がやり場のない思いを抱き、転換すべき道を模索していたのは知っていた。だから、ユヴィンゴなのだ。

「具体的な日程が決まったら、教えてくれよ。誰にも分からないように見送るから」

「ああ。いいよ」

僕らは、どちらから言うでもなく立ち上がって歩き始めた。砂浜から小さな丘を超え、サボテンや灌木類の自生する斜面を左手に見ながら、小道を辿る。海鳥島の首都アルカサルへ帰る道だ。

椰子の葉の屋根を持つ粗末な人家が並ぶ未舗装の埃っぽい通りを行くと、市壁と市門とにぶつかる。門衛はいるが、ここ数年、チェックはなかった。通過税はバスタリヤ家以後、廃止されている。輸入船からの関税だけで充分なのだ。

海は島に富を齎したが、島民には不幸を齎す。

南北いずれの大陸からも等距離にあるために、戦略的要所、海洋貿易の最重要中継地点として、南北の貴族豪族や王侯らが海を渡って覇権を廻る諍いを繰り返し、策謀とやむを

知らず、占拠して栄えれば蹂躪、滅びては戦渦、その都度に各国の思惑に翻弄された住民らは、辛酸を舐め尽くしていた。アルカサルは古い街だ。

石畳の細い路地を抜けて、旧市街に入る。洗濯物が紐に吊るされ、小さなベランダに鉢植えの花。シエスタ。永くこの島に君臨したユヴィンゴ王国の影響で、峻厳な北方様式の石造建築が目立つが、街の雰囲気は南方の爛惰に満ちていた。

しかし、真の平和ではないことを、島の誰もが感じている。

パスタリヤ家の治世は安定していた。同家の背後に、南大陸の軍事超大国、マールロ帝国の皇帝羅班らはんが控えているからだ。これに対抗できる者は、北大陸の覇者、神聖シルヴィエ帝国皇帝ジュラス以外になかった。とは言え、ジュラスが簡単に動く筈がない。両雄相争うとき、すなわちそれは全世界を巻き込む大戦となることを意味するからだ。

海鳥島の利点を知り抜きながら、敢えて羅班が直接支配を行わない理由もここにある。公然と島を占拠すれば、ジュラスも即時に立たざるを得ない。いかなる戦にも時期というものがあるが、両者はいまそれを見計らっていた。しかし、それも長くはない。

シルヴィエがユヴィンゴ介入に積極的だった理由が、彼らの教化活動（神聖という名を冠するとおり、彼の国は苛烈な宗教国家であった）に名を借りた拡張主義ばかりではなかったことを思えば当然である。

ジュラスは、海鳥島に関する巨万の利潤に目をつけていた。だから、ユヴィンゴを狙ったのである。ところが、王国崩壊後、間髪入れぬ侵略を行った羅班の手先、パスタリヤに島を掠め取られてしまった。

歯噛み地団駄し、失地奪回に等しい心境で、ジュラスがパスタリヤ家転覆の計画を狂速猛進させるのは、火を見るより明らかなのである。

島の反政府組織に対し、莫大な武器や資金援助が行われるのも、ほとんどがシルヴィエ絡みであった。強国を後ろ楯に、叭羅蜜多らがかくも強く行動できる理由がそこにある。

ここは、数千年の歴史の中で数多の者たちが来ては去った結果、多民族多宗教国家となった島だ。シルヴィエが求める民族・宗教単位の非合法組織に事欠くことはない。

僕らは、カフェ・マルタのテラスに坐る。で、再び議論をし始めた。

叭羅蜜多が尖った鼻を僕の刺青へ、皮肉を込めて向けながら言う。

「アリアノ人らの龍神信仰集団ヴァジチェが最近、また活発化しているんだ。既にスベタニア人ら十数人が暴行を受けている」

僕は、叭羅蜜多が初めて僕の刺青を見たときの、驚きと失望と憎悪との表情を忘れられ

ない。彼にしてみれば、どう説明しようが信じられない裏切り行為であつた。だが、僕にしてみても両親をアリアノ人らに殺されているのだ。何も説明せぬ僕を、一度激しく罵った後は、二度と責めなかった。

テーブルに肘を寄せ、敢えて彼の目をまっすぐ見据える。

「またか。けれど、我らがスベル教の過激派の中にも、全ての背教徒に死を、と唱えて、同族のスベタニア人五名の喉を裂いた組織『聖人衆』もあるじゃないか。五名の中には、幼いこどももいた。

奴らは、失業中の若者を集めては、その社会的不満を利用していただけだ」

叭羅蜜多も眼差しを深めて頷く。

「確かに。幼いこどもの喉を裂くことが、どうして聖なる行為と言えるのか、俺にだつて了解はできんよ」

僕は、次第に込み上げる怒りに任せて言葉を続けた。

「そう言えば、この前、港で荷降ろしの日雇いをしたけれど、ヴァルゴ教のガリレオ人船員が言っていたよ、家を焼かれ、さ迷っていたときにアルレリア人オーデ教徒のゲリラに遭遇し、銃を突きつけられたそうさ。ガリレオ人の彼は、『オーデの神は慈悲を説かれた筈です』と言って命乞いをしたそうだが、アルレリア人ゲリラは、応えたらしい、『分かつたような口を利くな。死んで、神に会ってこい』ってね。

これがオーデ教か。ゲリラどもの宗教心というのは、この程度か。反吐が出るよ。

まあ、偶然、彼は、巡回中の正規軍の目に留まって助けられたらしいけれど」

「自衛するしかない。時には、理不尽も仕方ない。しなければ、されるのだから。

とにかくイ多し、おまえも気をつけろよ。ヴァジチェ過激派の先鋒は、武装部門じゃない。情報担当のリザドら一連の奴らだ」

脳裏に、リザドの顔が思い浮かんだ。濃く太く黒い巻き毛をうなじに垂らし、常に眼を睨^{みは}り滾らせ、鼻筋が高く、粗暴なジゴロの面相を持った若者。僕は、紫煙のこもった巢窟のようなバル（Bar）で、一度彼を見たことがあった。

叭羅蜜多が蔑みの感情から、陰しく目を細める。

「奴ら、資金源にしていた芥子の実でいかれちまったのか、去年あたりからやることが尋常でなくなっている。

ヴァジチェ幹部らも手に負えなくなっているらしい。民族浄化と称して、無差別に女を犯し、男を殺しているんだ。俺らスベタニア人が特に狙われる。南系北系の区別なんて、

奴らなら、なおさら認識しない」

不安が走った。

日が暮れて家に戻ると、妹の鞆があつた。ユーカは、かつて彼女の乳母だったウマリヤの家に預けられていたが、時折り学校帰りなどに、こうして寄ってくれる。

ユヴィンゴ王国統治時代、我が家が裕福だった頃に建てられたこの屋敷は、ほとんどの部屋が使われていない。維持できないので、早く売りたいのだが、裏切り者の家屋には、買い手がつかない。家を担保にスベタニア人系の銀行から借金して、税金などを工面しているのだが、あと数年が限界だろう。

妹の姿は、どこにも見えなかった。薄暗い家内には、人の気配がなかった。

多分、僕を待ち切れなくて近所に遊びに行ったのだろう。

知らせが来たのは午前二時だった。

死体安置所に置かれた一〇歳の下半身に着衣はなく、どす黒い血がこびりつき、裂かれていた。ユーカの靴は片方がなかった。残った靴が泥だらけで破れ、逃げ惑ったことを物語っている。内臓は暴かれ、子宮が持ち去られていた。右眼球は抉り取られている。

陵辱された上に虐殺された屍。僕は絶叫し、崩れた。

こんなことが許されているのか。まだ幼い少女が、何の罪もなく、どうしてこのような酷い目に遭わなければならないのか。どれほど痛かっただろう、どれほど恐かっただろう。助けを求めても、誰も助ける者はいなかったのだ。胸を引き裂きたくて掻き筆った。

「被害者の兄だな」

磨かれたブーツが目の前にあつた。僕が顔を上げると、官憲が眼を剥き、眉を顰めた。

刺青のせいだ。胸を反り直した彼が言う。

「事情を聴取する。取調室へ来るんだ」

僕は、精神の苦痛と身体の疲労とにふらつきながら立ち上がった。午後七時ごろからあちこちを捜し回り、ウマリヤの家にも帰っていないことを知って、夜中をも構わず再びユーカの名を叫びながら路地を廻ったために体力も失っていたのだ。

調書が取られ、僕がイ弓妻・イ月^{いてる}の息子と知ると、取調官の目つきが変わった。彼は、南系のスベタニアに違いない。

「そうか、ユヴィンゴの犬、諜報部のイリリが父か。因果応報だな」

僕は、目が飛び出さんばかりにこの男を凝視した。信じられない言葉だった。いくら父に恨みがあつたとしても、妹に、あんなに惨い殺され方をした妹にその言葉があつてよいものか。膝を握る手が拳に変わるのを制御できない。

「どういう意味ですか。妹にどんな罪があつたと言うのですか」

取調官は渋面を作って、咳払いする。

「独り言だ。余計な口は利くな」

こいつを殺したい。それが迸る。憤りが脳髓を支配し、他に考えられない。

聴取を終えて、警察を出たときは既に朝方であつた。状況や手口から、ヴァジチェの犯行と断定されたらしい。

両腕を支えられて署の門まで来ると、驚いたことに外は人ばかりだった。十数人の警察官が怒声を上げて抑止している。群衆の中には先住民族擁護団体がいて、警察に抗議していた。

「アリアノ人を貶める毘だつ。差別を撤廃しろつ、スベタニアの傲慢に神の制裁を！」

こいつらは、幼い少女が虐殺された事実をどう考えているのだ。僕の妹の惨死なんて、眼中にないのだ。まったく問題がすり替えられている。アリアノもスベタニアもガリレオもアルレリアもシルヴィエも関係あるか。年端も行かぬ女の子が強壮な戦士でさえ慈悲を乞うほどの恐ろしい殺され方をしたのだ。その現にある事実が彼らには見えていない。

信じられない光景だった。

判っている、ここにいるほとんどの人々が同情的な普通の人たちであることは。だが、彼らは、存在しないに等しい。僕は、心を制御しようと努めた。

みすばらしく痩せたアリアノ人らしき男が大きな目をひん剥き、唾飛罵声する。「貴様ら殺戮者は、一人残らず浄化してやるぜつ」

彼は僕に向かって言っているか。これはユーカの死に向かって言われている言葉なのか。何一つ罪を犯さずに幼くして虐殺された妹に向けられ、言われる言葉なのか。死体安置所にあるあの屍に向けて言われている言葉なのか。これはほんとうに現実なのか。涙が噴き上げ、怒りが込み上げる。

警察官を振り切って、拳を振り上げた。抑えられる。四人に手足つかまれ、運ばれる。

僕は、天に絶叫した。

気がつくとき、自宅のダイニングの桌面に両肘を突いて俯き、木目の凹凸を凝視していた。

だが、ここへ至るまでの記憶は明確にあった。憤りのあまり他のことが意識になかっただけだった。

誰もいない家。いつものことだった。だが、ここに妹が帰ってくることは二度とない。それが僕を貫いた。テーブルを叩く。額をこすりつけ、呻き泣く。次から次ぎへとあふれる涙。

かつて父母を殺された。今度は妹だ。悲憤が胸を張り裂かんばかりに僕を駈り立て、大脳皮質をいっぱいにする。家を飛び出した。

興奮を募らせ、身を震わせ、路地裏を歩く。既に昼近い。動脈から噴き上げたばかりの血のような濡れ色の僕の緋髪が、風に吹かれ頬にそよぐ度に、火の粉が飛ぶのを感じた。

近所にアリアノ人の経営する雜貨屋がある。商才のある店主は、同族の中では、成功者と言えた。僕とは、以前より顔見知りで、名前をサクサロサといった。

僕が軒下に取り込むと、彼が大きな丸鼻に頬を寄せるようにして、悲しげな顔で挨拶する。

「やあ、イ多し。この度は何と言っていいか、ユーカーちゃんが大変なことに・・・」

僕は、憎しみに漲り開いた目で一秒間、サクサロサを睨んだ。太って人のよい店主は、何が起ころうとしているのか分からぬ表情だった。

僕は、何も言わずに彼の顔を憤怒の拳で殴りつける。売物棚の上に倒れ、鼻血が噴出する。アリアノ人客たちが一斉に驚愕の眼差し。

店内で奔馬の如く滅茶苦茶に暴れた。客たちが逃げ出す。逃げ遅れた五歳くらいの男の子を若い母から奪い引き離した。サクサロサが叫ぶ、「止めてくれ！ イ多しっ！」母親が悲鳴を上げる。それが余計に、僕の逆上を爆裂させる。陶器の並ぶ台の上にこどもを叩きつけた。

僕は、狂おしく叫ぶ。

「貴様ら、アリアノは皆殺しだっ、リザドにそう伝えろっ！ 一人残らず生皮を剥がして吊るしてやる、全滅だ、一人だって地上に生かさないうっ！」

誰かが後ろから羽交い絞めにしながら、僕の口を手で塞ぐ。

「やめろっ、イ多し、ばかなまねはよせ」

叭羅蜜多だった。

彼のアパートに坐っていた。

向かい合って黙っていた。僕は俯き、彼は僕を見続けていた。

「叭羅蜜多」どうにか口を開いた。「勝ったと思っているだろう」

怪訝そうな声で応える。

「何のことだ」

「君が言ったとおりさ。妹を殺され、アリアノすべてが憎い」

「やめてくれ。俺は、後悔しているんだ。俺があんな喻えを言ったせいで、こんなことになっちまったみたいで・・・」

「アリアノ人全部を虐殺したい。それが率直な気持ちだ。解っている。だが、理不尽でも止められない。理不尽と言うなら、この感情をどうしたらいいのだ。奴らは、奴ら自身の深層にある欲望を、民族の大義という隠れ蓑に蔽って、民族として僕らを憎み、妹を虐殺した。僕が奴ら民族を憎むのは、当然だ」

「もういい。いまは何も考えるな。・・・と言っても、無理だろうが」

「叭羅蜜多」

「何だ」

「銃を調達してくれ」

「どうする気だ」

「決まっている。リザドに命乞いをさせてやる。殺さないでくれと懇願させ、その目玉をぶち抜く」

「ばかなことを言うなよ」

「本気だっ、絶対にやってやる。やり終えるまでは、例え死んだって死に切れないっ」

叭羅蜜多が黙った。

僕は、立った。彼の考える時間を計算している。そう長くはない筈だった。部屋の隅にある甕の水をすくって顔を洗う。鏡があつた。刺青が映る。アリアノの刺青だ。苦い思いが走る。皮膚ごと剥がしたい衝動に促された。この刺青をはじめて見たとき、叭羅蜜多がどんな想いだったかを思い知る。なぜこんなことをしたのか。以前に起こったことといま起こったことと何が違うのか。親を殺されるのと妹を殺されるのでは、意味が違うのか。だが、微々たる罪の意識しか感じない。憤りと悲しみとが一切を奪ってしまっている。

僕は、坐っていた場所に戻った。彼が言う。

「独りでやる気か」

「あたりまえだ」

「無理だ。俺もやる」

「だめだ。危険だし、君は来月、渡航を控えている。悶着が起これば、ご破算になる」

「関係ない」

「僕の問題だ」

「ふざけるな。俺がどんな気持ちか分からないのか。俺だって、はらわたの煮えくり返る思いなんだっ」

僕は、襟をつかんで右腕で胸を抑えた。再び涙が浮上する。「だめだ。とにかく僕独りだ」

「ならば、銃は用意しない」彼が言い切った。

妹の葬儀が終わり、僕は、教父の居室の扉を叩く。聖ジェソット・デッラ・アマタ教会は、スベタニスタ崩壊の遙か以前、齊曆二五四一年にスベタニア人の豪商らが寄港時にも礼拝できるようにと、莫大な布施を以て本国教皇庁に請願し、建てられた。

「教父様、失礼いたします」

太った白髪の聖職者が眼鏡をずらし、上目遣いに僕を確認すると、笑みを作った。

「おお、イ多し・イ月り。神よ、哀れなるあなたの息子を守りたまえ。願わくば、聖なるご慈悲を賜らんことを。」

ユーカ・イ月りのことは、まさしく言葉に尽くせぬ不幸であつたが、きょうは善き正しき神への導きが為された。ユーカもいまは神の御許におるに違いない。亡き人を愛し、悼むは尊いことなれど、長く哀しみに浸ってはなるまいぞ。

さて、そこで何かね」

分かっているくせに。僕は、そう思った。約束の金だよ、と。

「教父様、きょうはありがとうございました。お志には届きませんが、妹の供養のため、聖なる神へのご奉仕のため、些少ですが、これをお収めください」

飾りのついた封筒を差し出した。この中身で、僕の残り財産の半分が消える。あと半分で武器を買い、リザドを殺す。

教父がロザリオを額の位置に上げ、聖なる威厳を繕い、受け取った。

「おお、これは。君の気高い信仰を、神も必ずやご照覧されていよう」

為すべきことを終えて、退出した。礼拝堂では、叭羅蜜多が待っていた。外では小雨が降り出しているらしい。

「終わったか？」

「ああ。くだらない。だが、妹には人並みにしてやりたかった」

「そういうこと。人間ってのはな、そうそう理屈どおりに生きられないものよ」

「無駄口はいらぬ。早く戻って計画の準備に入ろう」

僕は、叭羅蜜多とともにやることにしたのだ。銃が欲しいから。彼を巻き込んではいけないと判っているながら、憎悪の滾りが僕の良心を灰燼にしていた。我が思いを遂げるため、叭羅蜜多を犠牲にするに等しい。

「いや、イ多し、ここがいい。ここなら奴らが来る心配がない」

「そんな心配があったのか」

「おまえ、自分が何を言ったか忘れたのか。アリアノの前で、リザドを殺す、アリアノを全滅させると宣言したんだぞ」

「そうだよ」

「そうだよじゃないぞ。或る意味では、リザドを殺るのは、おまえの自衛でもあるんだ。いまなら奴を殺しても、ヴァジチェの連中は、無視する。それほど問題になっているからだ。いまの奴は、狂犬だ」

「それなら、スベル教会にしようと関係ないじゃないか。奴ら、タブーなんか気にしないだろう」

そのとおりになった。

帝国シルヴィエは、自動装填連射銃を持つ世界唯一の国である。自走式装甲戦車や二〇連装の発射筒を搭載する自走式発射機、バズーカ砲や地雷、戦闘用飛行機やミサイル弾も実用化されている。他の国では、十二発弾倉つきの銃や単発の大砲ぐらいで、いまだ剣や弓での戦争も多い。軍事大国と言われるマールロ帝国でさえ事情は同じだ。

シルヴィエは、一方的な技術の発達が国外へ流出しないよう、厳重なチェックを施しているが、どんな時代、いかな状況においても国家を嘲るよう、金儲けのために法を破り、売り捌く連中がいる。同胞を顧みずに、だ。苛烈なシルヴィエは世界で最もそれが少ない国であったが、皆無ではなかった。

聖ジェソット・デッラ・アマタ教会礼拝堂の扉を蹴り破ったアリアノ人らが自動装填連射銃を打ち込んだ。叭羅蜜多と同時に身を伏せ、割れたステンドガラスの窓から飛び出し、脚に切り傷を負う。こどもの頃の、鬼ごっこの要領で言葉交わさず互いに二手に分かれ、

低い塀を飛び越えた。叭羅蜜多が別れ際に、おまえのこういう勘だけはいつもあたると悪態を吐く。

僕は、肩を撃たれ、出血がひどかった。汚物に濡れた路地裏を迷走する。狭い道があれば必ず入った。峡谷の底から見上げるような細い蒼穹。それ以外は引き延ばされ、滲んだ画像でしかない。扉を蹴って他人の家の中を通過する。市壁の門の前で走るのを止めた。血を見られぬよう、かつ不自然にならぬよう歩く。門衛に怪しまれずに外へ出た。

再び駆ける。人気のない灌木の岩場を抜け、墓場の柵を越えた。薄れつつあった意識で地下共同墓地に下り、身を隠す。そこから先の記憶がなかった。恐らく気を失ったに違いない。

どれくらい時間が経ってからだろうか、数人の人間が僕の身体を運んでいることに気がついた。朦朧として、抵抗できない。降ろされた。

誰かが僕の服をまさぐる。治療のようにも思えた瞬間、安堵したのか、再び意識が遠のいた。昏闇に落ち、眠った。

夢を見た。

瞼を開く。柔らかい、小さな光に人影が照らされていた。僕の口に何かがあてられる。水の入った木製のコップだった。麦藁の上に寝かされている。

「さあ、ゆっくりと飲んでください。ゆっくりと、です。まだ出血は止まっていません。でも、弾は貫通していますから、安静にして薬を塗れば大丈夫です」

僕は、曖昧な意識の中、喘ぎから洩れるような声で訊ねた。

「君は」

少女が瞬きもせず、僕を見つめていた。龍の刺青が喉やら顔面やらを絡まりうねる異様に對し、目を逸らすことなく、暴力事件に因んだとしか思えない筈の怪我を負った僕を、幼子でも愛でるように看ている。

何よりも戸惑わせたのは、晴だった。青や碧や蒼や藍や紺のダイヤモンドを鏤めたように、眩く燦めいている。到底、人間のものとは思えなかった。

「わたしは、イイリヤ。そして、ここは安全な場所です。さあ、もう何も訊かないで、貴方の魂と身体とを癒してください」

だが、薄膜に蔽われていた意識は晰らかになり、記憶の縦糸が紡がれ、鮮烈に妹の屍骸を脳裏に閃かせると、同時に身体の痛みを甦らせ、叭羅蜜多の安否を気遣わせる。

「イイリヤ、僕の友達を知らないでしょうか。叭羅蜜多というのですが」

彼女が知る筈ない。僕らは、別々に逃げたのだから。すぐに気がついて言おうとしたが、えもいわれぬ感情が湧き起こって、開きかけた唇が止まった。このイイリヤとどこかで以前に出会ったような、漠たる記憶が籠れ上がるように甦ってきたのだ。彼女の眸もその刹那、揺らいだように見えた。

イイリヤが少し睫を伏せ、首を横に振り、吐息とともに応える。

「いいえ。ここには、貴方しかいませんでした。わたしたちは、貴方しか見ていません」

「ここは」

「地下墓地の奥の奥、その小窟のひとつ、忘れられた場所です。数百年前の乾いた亡骸と、わたしたちとしかいません」

「君たちは、どうしてこんなところに」

「さあ、その話は後でします。いまは身をやすらえてください、貴方の、そう、貴方の名前をまだ訊いていませんでした。貴方は」

「イ多」

「では、イ多、おやすみなさい。善き夢を。神のお恵みがありますように」

「イイリヤ。どうして、僕を助けるのですか。いかにも問題のありそうなこの僕を。君は、巻き添えを恐れないのですか。この刺青顔が怖くないのですか」

彼女の表情が強くなり、冽たる辞ことばによつて儼ただされた。

「畏れるべきは、ただ、神だけ。この世に起こり為されることは、すべてが神の与え賜う恩寵です。さあ、言葉を止めて、お眠りなさい」

言われるまでもなく臉の重さを感じ始めていた僕は、彼女の言葉に抗うべくもなく、まどろみに襲われた。触れてもないのに、イイリヤの皮膚の温もりが空気を伝導し、安堵と安らぎとを与えてくれたかのように。

落ちながら、僕は、イイリヤの肩越しに、この狭い一室の入口から半身を出して、薄光に浮き上がる人影を認めた。暗くて判然としないが、烈しい眼差しでこちらを窺っている。分かるのは、きつい巻き毛のシルエットだけであった。

僕は、眠った。

目が覚めると、僕のいる小部屋の外でいく人かが動いているのを感じた。

彼らの物音が静まると、優しい聖歌と祈りの呟きが聞こえる。小一時間ほどして、僕の様子を見に来たイイリヤに訊ねた。

「君たちは、いったい」

僕の包帯を柔らかい指で換えながら教えてくれた。

彼女らは、白哲金髪碧眼（無論、全員が白哲金髪碧眼ではなかったが）のシルヴィエ人であった。ただし、普通のシルヴィエ人ではなかった。

彼ら民族はシルヴィエ領内、或いは属国属州に居住し、帝国勢力の及ぶ範囲を出て住むことがない。安全のためにである。北大陸各国を侵略し、シルヴィエ聖教へ強制改宗させ、これに従わぬ数十万の人間を虐殺する国家を、誰が憎まずにしようか。大海を隔てた南大陸にさえ領土的野心を抱き、圧倒的先進軍勢力を有する神聖帝国は、南北両世界で畏怖され、蛇蠍の如く忌み嫌われている。シルヴィエ人がその領域外へと出れば、公的には各国の律法に従って扱われるが、実際、一般民衆レベルでどうされるか想像に難くない。彼らが域を出るときは、軍隊を伴ってでしかあり得ない。

既にここにいるだけで、イイリヤらがあたりまえな人々でないことは晰らかだった。

「わたしたちは、シルヴィエです。聖者イイルの御教えに従うシルヴィエ聖教徒です」

彼女が臆せず断言したときに、僕が驚いたのも当然だ。彼女たちには、事情があった。エレミタだったのである。

シルヴィエ聖教原理主義異端派エレミタは、清貧と恭順とを旨とした。聖教の原理原則に還り、聖典一字一句を事実として、聖教の本義である、愛と無執著、無抵抗主義を唱え、信奉する。北の覇者たる帝国の拡張主義的国策と相容れず、彼らが本国内では、墓廟の地下室等に集会するという話は聞いたことがあった。いまやそのみに留まらず、国内での迫害を逃れ、国外各域へも散ると言う。イイリヤの話によれば、島にも十数年前から住み始め、少しずつ増え続けているらしかった。ここは、エレミタの集会する場所だったのである。

イイリヤ自身、一年前に来たと言った。

「不自由はありません。わたしたちは、アルカサル市民とも没交渉ではないのです。もし誰にも受け容れられず、手引きされないものであったなら、上陸さえ不可能だったでしょう。シルヴィエ人以外の聖教徒が世界各地に隠れているのです」

はじめて聞く話であった。シルヴィエ人以外にも聖教徒が無数にいるのは知っている。蹂躪された国々の住民らは皆、強制改宗させられるのだから。

だが、勢力圏外にシルヴィエ人ではない聖教徒が実在するなど、知らなかった。僕ら海島島に限らず、他邦の一般国民でも知る人はいないのではないか。自らの意志によって、好んでシルヴィエ聖教に帰依するなど、到底信じられるものではなかった。

「聖教は、義しい、聖なる御教えです。帝国がそれに背いているだけなのです」

イイリヤがそう言った。

シルヴィエ聖教と言えば、苛烈で禁欲的、神が人生のすべてに優先し、日々の挨拶にも神への称讃を第一に、手紙を書けば神で始まり、何事も神への感謝を述べてから、神こそ唯一無二の眞實、神のために、神によって、神、神、神の絶対主義で、人間らしい自由の否定される恐ろしい宗教のように思われているが、実際、どのような教理を持つ宗教なのかを詳らかに知る者は、帝国及び属国属州を除けば、研究者でもない限りいない。

イイリヤがさらに言った。

「苛烈ではありません。最も優しい宗教、最も容易い宗教です。万民に為せなくて、何の意味がありますか。それは、真理ではない。

わたしたちも生活必需品等を手に入れます。アルカサルに住むシルヴィエ人以外の聖教徒たちから。必ずしも必要最低とは限りません。

そうです。無欲であることは最善ですが、無理な禁欲は心に凝りや窮屈を齎すだけです。異常な禁欲行為は逆に強欲にすぎず、偏執であり、思い上がりに等しいのです。自ら現実を常に関し、自らに合致する範囲の中において慎ましく、自惚れることなく、事実に敬虔であること、それが清浄ということです。

そうでなければ、貴方の肩を巻く包帯すらなかったでしょう。いったい、そんな有様でどうしますか？

イ多し。だから、わたしは、自らの求める分を自給自足する生活こそ最善と考えます。いまここでは、田畑を耕したり、糸を紡いだり、葡萄の実りを摘み集めたりする、楽しい営みは許されていませんが」

海外貿易の一大拠点である海鳥島には、危機管理上の入国制限しかない。国交の有無は問われない。国交のない国からの来訪者には、特別税が加算され、申告書類が二、三枚多くなるだけである。どこの国の者でも自由に寄港し、上陸できることが原則であった。併せて事業活動においても、所定の税を納めれば、保安上の規程に抵触しない限り、基本的に制限がなかった。

ただし、規定されてはいないが、社会通念上、シルヴィエ側にいる人間の入国及び事業活動は認められないというのが常識である。自らの衣食のためであっても、耕作や製糸は生産事業だ。イイリヤが言うのは、そのことであつた。

彼女たちの滞在自体は違法ではない。エレミタが増え続ける理由はそこにあるのだろう。

だが、公然とは姿を出せないのも事実である。いまのところ彼女らは平穏だが、保障された移民生活ではない。人目を避けて隠れた生活をしている分には、政府も（僕ら一般人には察知されていないが、当然、パスタリヤ家は彼女らの存在を掌握しているに違いない）敢えて干渉しないと思うが、綱渡りのな身上であることに、変わりはない。

だから、ことが生じれば取り締まられる可能性があった。黙認しているとは言え、基本的にパスタリヤ家をはじめとする羅弓ノ人らは、シルヴィエに対する警戒心を強く抱いている。

僕の心配は、その点であった。例えば、僕の血痕をたどったリザドの追跡がここに及び、再びあのような事件が起これば、彼女たちにとって様々な意味で災いとなるに違いない。

で、襲撃を受けた翌日に、僕は、この場所を出ようと試みた。

「まだ無理だよ」

白髪の老人が言った。修道僧のような質素な身なりで、皺の奥に青い目が小さく光っている。サンディアルゴという名で、椀に汲んだ水を持ってきてくれていた。

その慎ましく敬虔な姿は、北大陸全てを支配しようと目論むシルヴィエ帝国の残虐さが有名なだけに、不思議な気持ちを起こさせる。

「さあ、これをゆっくり飲みなさい」

「ありがとう。でも、サンディアルゴ。僕がここには君らに迷惑がかかる。見てくたさい、銃で撃たれたのです。危険な事件の渦中にいます。僕を追ってくる者がいるのです。君らにも災いが及ぶ。だから、行かなければならない」

「もし貴方を追ってくる者があるならば、彼らはもういま頃はここに来ているでしょう。アルカサルからそれほど遠くはないのですから。何事もないのは、貴方を見失ったからに相違ない。むしろ、中途半端にここを出ない方が貴方も私たちも安全なのではないかね」

一理あるが、あのリザドがこの場所を嗅ぎあてないと言い難い。

別の声が出た。

「行きたい者は行かせてやればいいさ、サンディアルゴ」

老人が振り向く尖に、強い巻髪を持った少年の姿が見えた。

「何を言う、エンリ。『訪なう者を拒んではならない』、御教えにも斯くある。おまえは、神の摂理に抗うのかね」

「そんなことはない」エンリと呼ばれた少年（僕と同じ年ぐらいだ）が俯いた。俯くと、眉根の寄った顔立ちが余計悩ましげな昏い翳りを帯びる。「ただ、彼の心配も、もつとも

だと思っただけだ」

「では、何かね。君は、災厄を惧れるのかね。『すべては神の与えたもう眞實である』、これが聖なる御教えだ」

「分かっているさ。誰が惧れるものか。『我神の与えたもう事実一切を、欲びと感謝とを以て受諾せり。眞實を肯んずる者に幸いあれ』、御教えは常にこの胸にある」

「ならば、宜しい」そう言って、サンディアルゴが去った。僕とエンリとは、互いに黙ったままでいた。暫時後、僕の口から言葉が出た。

「イイリヤは、きょうはどうしたんだろうな」

タブーに触れたようにエンリが反応する。

「イイリヤに思いを寄せても無駄だぞ、イ多し。彼女には、シルヴィエ本国に恋する人がいるんだ」

別に意外ではない。彼女は敬虔な信徒ではあるが、聖職者ではない。恋人があっても、驚く必要があるのか。それを特別なことのように言うエンリの態度で、僕は、彼の心底を推し測ることができた。イイリヤに優しく手当てされた僕に対してどういう感情を持っているかをも。

「君は知っているんだね、エンリ。僕は、イイリヤのような美しい人の恋する男がどんな人物なのかを知りたい。教えてくれないか」

「なぜ知りたいがる」

「興味があるからさ。きっと偉大な男だろう。それとも聖なる者か」

「両方だ。」

レオン・フランシスコ・デ・シルヴィエ。シルヴィエ姓を名乗れる有数の名家に生まれ、大枢機卿アグストス猊下の長子であり、颯爽たる長身、黒髪を靡かせ、シルヴィエ陸軍において最も有力な将校だった。英雄中の英雄だ」

「黒髪のシルヴィエか。旧家の割りに珍しい。イイリヤとは、だいぶ身分が違うようにも思えるが。それに将校でもあったということは、いまは違うという意味か」

エンリが僕を睨んだ。

「そうだ」

「で、どういうことなのかな」

彼が躊躇うのを、僕は、興味深く眺めた。

「レオンは、高貴な生まれの高邁な魂を以て、帝国の腐敗を歎き、聖教の原理原則に帰る

べきという思想に至ったのだ。その思いは、僕らエレミタと同じだ。約束された輝かしい未来を捨て、彼は、多くの原理主義者と交わった」

「なるほど。そうやって行くうちにイイリヤと知り合ったわけだ」

エンリが不愉快そうに眉を顰める。知ったことか、僕は、そう思った。

「そのとおりさ」

「で、二人は恋に落ちた、と」

その言葉を言いたくなさそうだったので、僕が代わりに言っただが、彼は怒気を孕んだ口調で応える。

「分かったような口を利くな、イ多し」

「そうか。悪かったな。けれど、なぜ、レオンは、いまここにいないのだ」

僕の見る範囲にはいなかった。

「イイリヤだ。彼女の美しい心持ちを考えてみる。二人の身分はあまりにも違いすぎる。イイリヤなら、どうするか。いや、おまえなんかには察しがつかないだろう」

「分かるさ。でも、それだけで別れたのか。信じられないな」

「おまえのような下司な刺青者には分からないさ、イイリヤの高潔な心が。彼女がいかに苦しんだことか。イイリヤは、いまでもレオンだけを愛している。聖の聖なる愛で。」

そう、これは、汚れない、誰にも汚すことのできない、絶対の、神聖なる愛だ」

それを言うのが、精一杯のようであった。口をきつく結んで、下脣を引き絞っている。

あほらしくなってきた。

「分かったよ。彼女が身を引いた。それでイイリヤはここに来た。そうだろう？」

エンリが目を睜^{みは}らせる。

「だから、おまえは、下司なんだ。イイリヤがここに来たのはそんなこととは関係がない。エレミタの理想を実現するための、気高い精神で来たのだ」

嘆息せざる得なかった。

「ああ、僕が悪かったよ。すまない。ともかくも美しい悲恋だ。ありがとう、聞かせてくれて。以上だ」

会話はそれで終わった。もう少し訊きたいことがなくもなかったが、暇はない。ここを出て為すべきことを再び考える。リザドへの復讐は終わっていないし、叭羅蜜多の様子も知りたい。

粥ばかり食べているせいで力が入らないのか。立つことはできたが、筋肉が強張り萎えている。夜の勤行が終わって小一時間が経っていた。朝の祈りの時間を考えて、皆既に眠っている。

僕は、部屋の出入口までたどり着いた。扉などないからそのまま闇の廊下へ出る。壁面には乾いた死体がずらりと並んでいる筈が見えない。それは見えなくてもいいのだが、廊下自体も、行くべき方向も定まらなかった。

「待つて」

驚いて振り向く。

イイリヤだった。

姿は見えないが声で分かる。青い眼が燐のようにこちらを睨んでいる。ような気がした。敢えて応えない。僕が見えているのかどうか、確証がないからだ。

「どこへ行くのですか、イ多し。こんな時間に」

見えているらしい。

「用を足すのさ。もう独りで行ける」

「そうですか。では、ついて行きます」

「女性が近くにはいけない」

「この闇の中、足下が覚束ないでしょう。それに、貴方の身体は衰弱しています。つき添いが必要です」

「独りで充分だ」

「貴方は、嘘を吐いています」

「嘘？　どんな？」

「独りでここから出て行くようとしているのです」

「僕がか？　おかしいことを！　イイリヤ、なぜ、そう言い切れる」

「サンディアルゴから聞きました。貴方は、昼間、立ち上がって出て行く素振りを見せたと、彼が言いました」

幾許かの躊躇はあったが、嘘が面倒臭くなった。

「そうです、イイリヤ。でも、それは、貴方たちのためです」

「その心配はいらないと、サンディアルゴも言った筈です」

感情の昂ぶりが込み上げてきた。

「僕には、やるべきことがあるんだっ！」

「何をです。イ多し、話してください」

「貴方には、関係がない」

「いいえ、だめです。わたしには、分かる。貴方は、再び危険に飛び込もうとしています。見過ごすことはできません」

「余計なことだよ、イイリヤ」

彼女が黙り、僕は、立ったままにいるのが辛くなった。部屋に戻って坐ればいいのだが、皿ランブの薄明かりに照らされるイイリヤの表情に耐えられないことが分かっている。

「行かないで、イ多し」彼女の柔らかな指が、僕の手の甲に触れた。「お願い、行かないでください」

僕は、動揺した。どうしていいのかさえ分からない。

「イイリヤ、君には」

恋人がいるじゃないか、と言おうとして止めた。何を勘違いしているのかと言われそうだったから。だが、触れるか触れぬかの指尖の、触感の暖かさがそれを否定した。数十cm先に、蒼や藍や紺や碧や青の粒が煌めくイイリヤの晴を感じる。

唐突な衝動が籠れ込み上がり、彼女を抱きしめてしまった。

「イイリヤ、僕は、堪えられないっ」

聞きようによつては誤解を招く言い方だと気づいたが遅すぎた。彼女がゆっくりと僕の腕をほどき、普段の優しさに戻ってこう言う。

「何が貴方の心を、それほどまでに苦しめているのか、どうかわたしに話してください、イ多し」

彼女は、勘違いなどしていなかった。僕が心に苦しみを隠していることを察していたからに違いない。最後の砦が崩壊し、抑えていた感情が炸裂する。妹のあの惨たらしい屍、この胸を裂き、喉を震わせる。イイリヤの肩に額を埋め、嗚咽した。

「ユーカが、妹があんな惨たらしい殺され方をするなんて、ああ、信じられない！　いまでも、信じられません！　神様！　ああ、イイリヤ、僕は」

だが、このときだ。

「裏切り者！　ああ、イイリヤ、貴方がどうしてこんなことを、どうしてこんなことが、貴方にできるのですか、イイリヤ！　貴方には、レオンがいるのに！　それなのに、こんな男に身を委ねて、イイリヤ！　貴方のレオンへの愛は、どこにあるのです？　ああ、いったい、どこに？　イイリヤ、どうしてですかっ！　イイリヤっ、僕は、僕は！」

悲痛に叫ぶ声は、エンリであつた。僕らの關係に猜疑を抱き、妄想にとり憑かれてイイリヤの後を追つてきたのだろう。嫉妬と驚愕、怒りと怨みとに燃え滾る、彼の復讐の眼が
見えさせるような気がした。

レオンとイイリヤとの聖なる愛という美名の下に、自分の心を殺していた彼にとつて、抱き合っているかのように見えるこの場面ほど残酷なものではなかったのかもしれない。

なおも彼が訴え続ける。「イイリヤ、信じられない、貴方が、貴方がこんなことをするなんて！ 胸が突き破れそうだ！ ああ、神よ、信じられない！」断末魔のような、呻きとも叫びともつかぬ声と、壁を烈しく叩く音が響いた。

イイリヤが鋭く叱責する。

「何を考え違いしているのですか、エンリ！ やめなさい、ばかなことを！ エンリ！」

だが、彼は、ついに絶叫した。嫉み妬みの激情が彼を破砕したのだ。

「復讐してやる、薄汚い裏切り者に死を！ 僕のこの苦しみを貴様らにも与えてやる！」

「何ということを言うのですか、エンリ！ 落ち着きなさい！」

だが、狂妄に苛まれている人間に言葉など届く筈がない。「イイリヤ、裏切り者！ ああ、神は見ているぞ！ 神は見ている！ 僕は、義しい！」

つまずき蹴りながら、木靴で床を連打するよう駆ける音。

「エンリ！」イイリヤが叫ぶ。「待ちなさい！」

靴音の反響は遠ざかった。

イイリヤが溜息をつく。

「多分、あしたになれば、冷静さを取り戻し、軽率な過ちであつたことに気がつくでしょう。彼は、とても敬虔で優しく、素直な男の子ですから。そう、少し生真面目すぎるだけなのです」

同様の考えを持つことが、僕には、できなかった。エンリのためではなく、イイリヤの安全のために。

「彼を放って置かない方がいいと思う。皆で捜しに行こう」

イイリヤが微笑む鼻音が聞こえた。

「貴方も優しいですね、イ多し。でも、大丈夫です。彼は、きっと帰ってきます」

違ふ。僕が案じているのは、そんなことじゃない、人間感情は生易しいものじゃない、イイリヤ、と言いかけたが、止めた。彼女の美しい気持ちに傷つけたくない。

「分かったよ。でも、もしあしたの朝までに帰ってこなければ、捜しに行こう。いいね、

イイリヤ」

「分かりました。貴方の言うとおりにしましょう。ともかくいまは部屋へ戻ってください。貴方の話を聞きます」

ランプの照らす麦藁の上に二人で坐った。僕は、冷静さを取り戻し、イイリヤの顔を見ることへの畏れがなくなっていた。

経緯いきさつを話した。

終わって、隣のイイリヤを見る。前を見据えたまま、涙を落としていた。美しい燦めきに胸が締めつけられる。彼女の哀しみが僕の心を優しく癒した。

「イイリヤ、ありがとう。妹のために泣いてくれるのか」

「そうです。そして、貴方のために」

彼女を見る度に感じる遥かなる懷慕、捉えられない情感とに、いまもまた戸惑う。横顔に見せる、頬の皮膚のきめ一つ一つに僕が抱く愛おしさ切なさ、砂塵の向こうに永遠に失われた、あまりに熱く燃えた叙情詩であった。

「イイリヤ」

再び強い衝動が僕を襲うが、自制する。イイリヤはこちらを向かなかった。感じ取られてしまっているのは断らかだったが、彼女は身をかばう素振りを見せなかった。僕を信じているからと言うよりは、同じ懷緬みまの情からに違いない。

イイリヤが口を開いた。

「そして、貴方は、リザドというヴァジチェの幹部に復讐するのですね」

濃く太い黒髪を巻き垂らし、眼を睜みはり滾ころもらせた、鼻筋の高いリザドの顔が泛ぶ。烈しい憤怒の苦しみが僕の心をどす黒く染めた。

「無論だ。何が言いたい？」

「危険です。成功しても失敗しても」切迫した顔つきでそう訴える。その表情をどこかで見たような憶えがあった。

僕は、わざと目を細めて、淡々と言つてのける。

「自滅すればいい。八つ裂きになればいい。僕は、久しく前から潰滅している。妹の死のためばかりじゃない。両親も殺された。この刺青はそのときに彫った。この龍こそが既に、僕を裂き破っている。

イイリヤ、君は心優しい人だ。美しい心を持っている。僕の気持ちは絶対に分らない。この身を裂くような苦しみも怒りも、耐え難い悲しみも。激烈な憎悪も。

いや、僕は、どうでもいい。妹だ。可哀想な妹だ。だが、妹を救うことはもうできない。あの凄惨な死の苦しみ痛みをなかったことにすることはできない。せめて魂の平安を祈る以外は」慟哭が込み上げる。

イイリヤが哀しみを湛えた晴で眉を憂えさせた。

「イ多し、どんなにか辛いでしょう。」

愛する者の苦しみや、取り返しのつかない凄惨なその死を見ることは、誰にとっても、どのような喻えもないほど辛いことです。何人にも堪え難い。なんびと

人は皆、愛する者に対して特別な気遣いを抱くから。自分のことは自分自身の心持ちで何とかできる。或いは、超えられる。けれど、他者の苦しみは超えたくとも超えられない。愛する者、近い者は、自分自身にはままならぬ自分自身です。だから、どこにも答えが見出せない。人は、悼む気持ちのやり場を失います。誰もが同じです。

しかし、イ多し、聞いてください。

もし貴方がリザドへの復讐を遂げたとしても、それでユーカは救われるのでしょうか。

彼女の悲惨な死がなかったことになるのでしょうか。

とても残酷な言葉です。事実ですから。そうです、イ多し。復讐において為されるのは、ただ、貴方の思いだけです。貴方の思いが遂げられるだけです。抑えがたい苦しみと憤りは理解できます。でもイ多し、このことをまた見つけてください。それがほんとうに、貴方の望みであつたか否かを。もちろん、答えは否です。貴方が望んでいるのは、ユーカの不幸がなかったこと、彼女がいまま無事で生きていくことです。

それが叶えられず、行き場のない怒りと悲しみが、貴方を復讐へと駆り立てるのです。

リザドへの復讐は代償行為です」

叫ばずにはられない。

「知ったことかつ！ やつらをぶち殺すまでは、この滾りは終わることがないっ。この身がどうなるうが、構いやしないっ！」

「それは、既に貴方の思いから遥かに隔たっています。悲憤の激情は、人間を奪い去り、本来の目的とかけ離れた場所へ、渦中へと無限に引き込み、奈落に沈めるのです。

イ多し、現に貴方はいま、すべてのアリアノ人に対する報復を欲しています」

僕は、興奮を鎮めようと歯を喰いしばった。このままでは、エンリと変わらない。

イイリヤが言った。

「復讐は、もはや苦しんで死んだ者たちへの癒しにはなり得ない、どのような行為もなり

得ないのです。既に起こってしまったことだから。

それはもはや考え方ではなく、厳粛な事実です。多くの人々が知っています。

それでいて、人間は憎憤に苛まれ、復讐へと駆り立てられる。烈情に捉われ、あまりの理不尽に心止まず、これを遂げずにいられない。だから、人は皆、諍^{しやう}わざるを得ない。

けれど、イ多し、それでもなおかつ、わたしたちが求めているのは、ほんとうは幸福なのです。自分や自分の愛した者たちの幸福なのです。だとすれば、報復が避け難く報復を呼び戻し、憎しみが新たな憎しみを炎上させて凄絶な不幸を繰り返すにすぎないその行為はあまりに自らからかけ離れています。痛ましい行為です。わたしたちのほんとうの願いとは、まったく異なるからです。聖教においては、こう叙^のべられています。『すべての人々に幸福を与えたまえ。斯くして諍^{しやう}いを終息させたまえ。神よ、この大地に、永遠の平和を』と」

僕は、堪らず再び喚く。

「夢だっ。死んだ者たちは、それでどうなるっ」

イイリヤが凜と応えた。

「では、貴方の考え方ですれば、どうなるというのですか」

僕は、黙悶した。イイリヤがさらに言う。

「どうにもなりません、イ多し。分かります、こんな言葉が何ら心を癒し鎮める力のないことは。でも、もうどうにもならないのです。それがどんなに堪えられない事実であつても、事実^{じじつ}は事実以外の何者でもありません、イ多し」

黙り続けるしかできなかった。心が烈しく自問し、自裂する。

僕を見守っていたイイリヤが口を開いた。

「辛いことばかり言つてごめんなさい。いいえ、強がらないで。あるがままの貴方でよいのです。イ多し、赦してくださいとは、言えません。ただ、謝らせてください。

貴方がわたしの言葉でとても苦しんでいることが分かるから。ごめんなさい、イ多し。

その唇の動きや、眼差し、苦悩を抑えようとする眉が、わたしの胸を突きます。

その苦しみを克服できないのは当然です。誰にもできはしないのです。解かっているても、言わずにはいられなかった。イ多し、心から謝ります。

わたしには、貴方が苦しむ様子に堪える強さがなかった。それはまた、わたし自身の心の問題です。わたしがわたし自身の心の苦しみから解かれるために、貴方にこの話をしたのです。

そうです、イ多し。わたしにも同じかたちで心の苦しみが襲います。人間は、そこから自由を得ることができない。

どんなに高貴な精神や崇高な自己犠牲を為そうとも、いかに執著を脱却し、無償の愛に生きていてさえも。神の恩寵や啓示を受け、叡智に目覚めていようと、です。

貴方が感じているとおり、怒りや悲しみという情動概念は圧倒的な力FORCEで人間の主権を篡奪します。

なぜならば、すべての概念がその本質イデアを持たないからです。それがどういうことを意味するか分かりますか。わたしたちは、理を以て物事を了解しているのではない。理解し、掌握した上で情念を滾らせ、慮り、微笑むのではない。むしろ、わたしたちがしているのではないと言った方が正確でしょう。

概念は知性ヌースではありません。もしもそうならば、いくらかでも手立てがあった筈です。でも、実際はそうではない。わたしたちは、様々な現象を了解していますが、いったい、何を理解していると言えるでしょう。顧みれば、そこには、ただ、了解があるだけなのです。ただ、忽然とそれが現象FORCEしているだけなのです、何ら経緯もなく。

諸概念は、力FORCEです。瀑流のような力です。それが了解を創り、その了解がわたしたちの意識であり、わたしたちを創るのです。

諸概念が理を以て構築され、解釈されているのではないということは、こういったことを意味します。

だから、何人たりとも逃れられる筈がないのです。わたしたちが概念するのではなく、概念があつて、わたしたちがあるのですから。人間の意識が脳神経細胞の興奮によって、内部的に現象することを思えば、これもまた当然のことでしょう。敵への恨み、家族への愛や哀悼さえも、このことでしかない、聖なる意義はない。

そうです、諸概念の非本質性イデアとは、こういったことをも意味するのです。イ多し、貴方は、インパルスがニューロンからニューロンへと伝わってゆく現象を、いかような本質性イデアだと解釈できますか。概念として、どういう意味を為すかを言えますか。

諸概念すべては物的な現象でしかない。生きようとする構造の上での、ただひたすら、便宜でしかない。

考えるまでもないことです。わたしたちは、事象を了解、すなわち情態を為して衝動し、行為FORCEします。力がその凄まじさを以て、諸概念を為すとき、自己実現を求め駈り立てられ、行為する者、人間を存在させるのです。わたしたちは、自らに合致する何かを得て自在感

に至ろうと、自己との同一化による安寧感を得ようと求めずにいられない。そこには過酷な絡繰りが仕組まれています。

要請は必ず叶わない、人間は絶対に望みを達せられない、平安へと至れる日は来ない。事故や虐殺、蹂躪されて叶わぬ願いなどがなくとも、常に人間は到達できぬ焦燥と虚しさ、満たされぬ餓えと渇渴とに苛まれている。要請自体が自家撞着することによって、平時に無事でいてさえ、人々は業火に焼かれているのです。

この構造が解かりますか。

要請とは、その性質上、必ず固有化・特定化された対象を、対峙する他者として必要とする。そうでなければ、何も為せない、意識が成り立ち得ない、そんな状況は想像にすらできない。けれど、イ多し、固有化・特定化とは、畢竟、鋭角化・突屹化と同義で、合致と自在と安寧との成就に必要とされながら、これを剋逆する。

晰らかです。御覧なさい。現実には常に非情に見えます。哀れな人々のささやかな希いをさえ意に介さず、見向きもしない。事実は巖の如く不動です。人間を疎外乖離するように。だから、人間は不安に怯え、懼れ、すがり、激情し、執著をせざるを得ない。捨てようとする母の裾を泣きながらつかむ幼子のように、終わりなく悼惜に塗れ、やむなき裂情にもがきあがく、すなわち愛し、憎しみ、欲する。

聖教では、これを『生存の畏』と呼びます。人間を生へと駆り立て続けるために、生存への意志が絶対に矛盾する欲求を与えたのです。その用途のために諸概念はあるのです。先にも言ったように、概念がわたしたちを構築するのだから、ここから、^{ミクロン}1エも出られない。出られる筈がない。

だからこそ、イ多し、わたしたちが、この絡繰りから脱却できないことを分かっても、その仮象の範疇において可能な限り、範疇表上『幸福』という概念で示される状態へ精確に近づこうと正しく努めるべきことは、既に論議以前です。この幸福への正精進が究極的に目指すべき幸福への最高の定義とは、まさしく聖教の、聖の聖なる御教えに言うとおりのこの大地に永遠の平和が為されることに異なりません。

この現実世界の中には、誰もが自らの眞實の要請に違逆して諍い、復讐を誓い、怨嗟し、妬みまた嫉み、愛執、悲憤慷慨、固陋な執著、それら諸々の代償行為に捉われ、これを為すべく衝動に駆られています。

これは恐らく絡繰りの構造上、妄執すればするほど加速度的に目的からかけ離れ、さらに渇渴した喉を罅割れさせ、幸福を欲せようと仕組まれているせいでしょう。

だからこそ、イ多し、この状況の中で、わたしたちは、自らの要請本来の姿に最も似た現象を正しく選び、わずかでもよいから幸福へと近づくべきです。他選択肢はありません。大地に永遠の平和を齎すことが最もわたしたちの眞實に最も近似するのだとすれば、これが絡繰りの中の遊戯たわむれでしかないことと承知の上であっても、余儀なくそこへと向かうべきです。誰が欲さずにいられましょうか、すべての人々が共感し、飽くことがなく自由で、怖れるべき何者もない安寧、哀しみの涙の零れることがなく、憎しみによって胸裂く苦しみの生じることのない、誰もが心奥で求める、永遠の夢あこがれを。

これこそが自明というよりもっと直截で、わたしたちそのものであり、実存そのものそれ自爾、眞實です」

どうして憤激せずにいられよう、このようなきれいごとを聞かされて。

「御上品な夢だ。理想主義的な空論にすぎない。君は家族を殺されても、その呑気な言葉が言えるか。敵は僕も愛する者も殺そうとする。奴ら享樂し、笑っている。妹は陵辱され、拷問された屍骸となった。君の言うような、そんな御託で心が収まるか。見ろ、絶えざる憤りが僕を苛む。身を裂く」

濃深の紺碧に変わった虹彩で僕を燦射し、イイリヤが言う。

「イ多し。正義を糾しても、事実は物的な非情性で、厳然と聳え、無表情に、微動さえない。あきらめなさいと言っているのではないのです。復讐ならば、貴方の望む眞の復讐を遂げてくださいと、わたしは言っているのです」

身振り絶叫の如く、齒を剥き出して彼女に抗議する。

「できない！ 耐えられない、イイリヤッ！ 理不尽だ！ 僕は、赦せない。永劫に赦すときはない。この憎悪で身を焦がし破り尽くすまで呪い続ける。なぜだッ！ なぜ、神はこのような道を敷くか。なぜ、こんなかたちでなければならなかったのか。神など存在しないっ」

イイリヤの睫が下り、眼差しが再び翳りを帯びた蒼に移ろう、青碧を水面の反射の如く瞬かせながら。

「イ多し、貴方のユーカがいま神の御許で安らぎの中にあることを祈ります」

蠟燭の薄明かりに古き室洞の石積、歳月と乾燥とに朽ちた面の凹部を陰翳の深淵に無みし、凸部を浮かび上がらせていた。表情が止まったままの頭蓋骨には、齒が幾本もない。

翌日、午餐の終わった後、地下墓地へと降りてくる者があつた。羅教の司祭であつた。

羅教は、パスタリヤ家が率いる羅弓ノ人らの宗教だ。炬火を掲げた二人の軽装歩兵を伴っている。エレミタの誰もが驚いていた。いまだかつてなかったことらしい。

司祭が威高く告げた。

「いまここにおる者らをすべて集めよ、さもなくば、パスタリヤへの謀叛罪で全員絞首刑とする」

一同は階段を突かれ上られ、地表に並列させられた。サンディアルゴが「この者は怪我人です。シルヴィエでもごさいません。何とぞご容赦を」と訴えてくれたが、伏し床にいた僕も引き立てられる。白日の下に出た。僕の刺青を見て、屈強の兵士らさえも慄き、目を剥く。

咳払いの後、司祭が自らを戒柱羅と名乗り、司教羅毘童の使いだと称した。再度、威を繕い直して僕らを睥睨し、言い放った。

「さて、包み隠さず申し上げる。この中に、イイリヤという者がおるのが分かっている。彼の者は前に進み出でよ」

聖教徒の誰もが畏れと不安とを浮かべたが、皆、彼女の方を見ないように努めた。だが、イイリヤその人が冽然と一歩前へ出る。

「司祭様、わたしがイイリヤです」

溜息が洩れる。司祭さえ、凜々たる彼女の美しさを、感動を持って見凝らした。黄金の髪が軽やかに風に靡く。

「ううむ。そちらがイイリヤか。実は、汝に良俗壊乱、及び淫魔行罪の訴訟が出ておる」僕は、エンリの仕業を直感した。聖教徒らは理解及ばぬらしく、あ然と愕くばかりで声もない。誰より目を睨いたのがイイリヤ本人であった。

「どういことですか、それは。そのような訴えをされる憶えは、この身にまったくありません」

司祭は、「反論されることに慣れぬ者の苛立たしさを露わにして言った。

「申し開きは、審判所でもらおう。我々は、以前よりおまえたちエレミタの存在を知り、潜在的敵国民でありながら、その反帝政姿勢と平和主義に免じて温情をかけ、これまでに一切を糾さなかった。だが、斯くも甚だしき罪状を上げられて、見逃すこともはや相成らん。

ともかくも大人しく司教の宰議する審問を受けるがよい。その上で、訴訟の沙汰をいかにようにするか決裁されようぞ」

まだ告訴は成立していないらしい。やや安堵を感じたが、イイリヤが麗すぎる心が心配であった。

うろたえ悲嘆に暮れ、ただ、祈ることしかできない聖教徒らを尻目に、僕は、ひたすら眠った。一日でも早く体力を回復しなければならぬ。目覚めている時間には、熟慮した。どういう手を打つべきか、エンリがどこにいるのか、司教の本意がどこにあるのか、を。イイリヤが連れ去られてから三日目の朝、痛みと暗澹たる気持ちを抱き、僕は、誰にも告げず、墓地を出た。細心の意を用いてリザドの目を気にしながら、アルカサルに入る。賭けのような気分だった。一切を見逃さない。すべてがリアルに眼に映えた。

考えは次々廻り、止むことがない。まず叭羅蜜多を捜そうと思った。少なくとも生きているのか、死んでいるのかぐらいは知っておきたい。

『自由の聖なる海鷲』の集まるカフェに赴いた。顔見知りのイザスに声をかける。辛子色の髪をした細面の奴だ。

「イ多し！ 絶対、死んでいると思ってたぜ。おい、何てこった！」

「黙れよ、イザス。騒ぐんじゃない。いまでも僕は、やばいんだ。それより叭羅蜜多は、どうしている？ 久しぶりにアルカサルに帰ってきたばかりで、事件以来の情報がなかった」

「奴は隠れているよ。無論、無事だ、かすり傷さえないさ。おまえは、撃たれたって聞いていたけれどな」

「僕は、逃げるのは苦手なだけさ。で、どこにいる、叭羅蜜多は？ 会いたい。できるかな？」

「もちろんだ！」

貧民窟にある怪しげなアパートの迷宮にでも案内されるかと思いきや、凱旋門から延びる華やかなアヴェ・シュルベルの高級アパートメントの二階で、叭羅蜜多は、赤繻子のソファとシルクのクッションとに埋もれ、膝高く脚を組みながら、合わせた両手の甲に顎を載せて僕を見上げる。彼がにんまり笑った。

「絶対、生きていると思ったぜ。リザドがプラザに目玉を抉った生首を吊るさないのが、その確証の根拠だったよ」

思えば、スベタニア人の貧民街とアリアノ人の貧民街とは隣り合わせだ。いくら官憲の目が届きにくいからと言って、そんなところに隠れる必要はない。彼がここにいるわけを

合点した。

「随分いい身分になったものだな、叭羅蜜多」

「普齊子爵の持ち物さ」
ふせう

「普齊？」

「ユヴィンゴ連邦スベタニスタ自治州のガリレオ人系貴族だ」

ガリレオ人、と聞いて僕には分かった。彼の民族は一部を除けば、世界のどこでも低い地位に甘んじている。つまり、普齊という人物は、貴族でありながら革命派側につく理由を持った人間なのだ。

「しかし、その子爵とやらは、何でこんなところにいるんだい？ しかも旧支配国の人間が、いまはパスタリヤの統治する島に敢えて来るとは」

「詳細は俺も知らん。特別な任務だろう」

無論、叭羅蜜多は、知らない。嘘ではないだろう。ただし、僕と同様の推測はしている筈だ。

革命を勃発させればシルヴィエとの対決さえ余儀なくされる人間が、南大陸勢力の側にあるこの海鳥島に来るとすれば、理由は一つしか思い浮かばない。対シルヴィエ戦略として、南大陸と、マールロ帝国皇帝羅班と手を結ぼうとしているのだ。恐ろしいことだった。南北間の紛争にさえなり兼ねない。そうなれば、この島もただではすまない。最悪はこれを引金に世界を二分して、大戦が起ることだってあり得るのである。

だが、僕には火急の問題があった。とにかくこれまでの経緯を、叭羅蜜多に語る。彼が左眉を上げ、右眉を顰めた。

「そのイイリヤとやらを助けたい、救い出そうって言う気なのか？」

「当然」

「ばか言え、そんな危険が冒せるか。いくら倒れていたところを拾われたからってな。それよりユーカのことはどうするんだ？ 忘れちゃったのか？ リザドの野郎を地獄へ叩き込むんじゃないのか？」

「リザドのことは後でもできる。ユーカは、もう死んでしまった。そっちの件に関しては、急ぐ理由がない」

「何てセリフだ！ それが実の兄の言う言葉か？ 信じられない！ イ多し、おまえ、シルヴィエ人の間でおかしくなっちゃったんじゃないのか？」

「叭羅蜜多、別段たいしたことを頼む気はない。エンリの居場所を見つけて教えてくれ」

僕は、有無を言わせずそう応えた。

だが、結果は最悪だった。

告訴人であると思われるエンリがパスタリヤ家警察の拘置所にいるという報告を受け、目尖は真つ暗になった。だが、いったい、告訴人が拘置されるなど、常識的にあり得ることだろうか。僕は、混乱した。エンリを説き伏せて、訴えを取り下げさせようという目論みが頓挫したことだけは確かだ。

僕は、両手で顔を覆って坐り込む。叭羅蜜多と、報告を持ってきた茶栖婆ちやすばという男とが黙って立ち尽くす。

僕がこの報告を聞いたのは、例の豪華なアパートメントの一室であった。きょうは部屋の一室である普齊子爵も同席している。高価な生地 of 服装で襟や袖にレースを飾り、背は高くないが、人を睥睨するようなやや吊り上がり気味の毗、その眼が愛嬌のある哀しげな表情を湛え、貴族臭を芬々とさせながら必ずしも憎めない若者だった。恐らく僕らと歳は変わるまい。この革命家が言った。

「ともかくも何か陰謀があるようですね。エンリが封ぜられているということの意味は、必要以上に喋らせない、言ってしまうばたわいもない妄想だから、或いは、訴えたことを後悔して告訴を取り下げさせない、まあ、そんなところでしよう。

だとすれば、彼の言動は誰かに利用されているのだと言える。イイリヤとやらに対する企みを持つ誰かにね。

イ多し、本来の原因を究明せずして打つ手は浮かばない。彼女を救いたいのなら、誰か何を狙っているのかを知る必要がある。イイリヤの安否の確認も含めて、直接会いにいつてみるのが、一番手っ取り早いと思われるが、いかがかね。よろしければ、ぼくが然るべき手筈を段取りましょう」

喜んで諾とした。

翌々日の午後、刺青を覆うように頭巾を被り、髪を垂らして偽造された身分証を持ち、僕は、普齊の下僕という設定で、羅教の宗教最高会議の諮問機関である真教委員会の専管する審判所の、大理石が大仰に振舞われた建物に入る。

面会室で待っていると、イイリヤが現れた。普齊の力なのだろう、僕らは、白い漆喰の壁に陽射しの反射する個室で、三人だけになった。アーチ型窓の外には中庭があり、槍を携えた衛兵が数名見える。僕の心配が口から迸った。

「イイリヤ、大丈夫か。何か変わったことは」

やつれてはいたが、イイリヤの凜たる態度には以前の優しさより、むしろ、清冽な毅然が備わって感ぜられた。普齊が思わず見入っている。

「イ多し、ありがとう。誰かがわたしに会いに来てくれるとは思ってもみませんでした。この身に関しては、何ら心配はいりません。わたしは、見てのとおり無事です。ところで、こちらの方は」

僕は、普齊を紹介し、ついでにエンリの状況を話した。このとき既に訴状がエンリから発せられていることは確認済みであった。イイリヤはそれを知ると驚き、傷ついたようであった。

「哀しい事実です」

普齊が口を開いた。

「ところで、イイリヤ、いまは時間がありません。単刀直入に訊きますが、何者かが貴方に何らかの要請をしませんでしたか？」

一瞬、イイリヤの眼が詰となる。

「どういう意味でしょうか」

普齊が何でもなしのように言っただけ。

「例えば、この件に関する責任者は、司教の羅毘童ですが、ある晩、彼がここに来て、貴方に対し、何か特殊な要請を行ったような事実はないか、というようなことです」

面と向かって、こんなことが言えてしまう彼に、僕は、はらはらした。と同時に、胸を抉られるような思いがする。普齊の言葉こそが僕の想定した最悪の事態だったからだ。

イイリヤが溜息を吐く。

「それは、つまり、彼がわたしに対して性愛を要求したということを示唆して言っているのですか？」

「無論です」

イイリヤが普齊を凝視した。彼も平静に目を細め、見返す。彼女が黙っていることが、不安の的中を予測させ、僕は、堪らず言った。

「イイリヤ、大事なことなんだ。この一件の真の原因を知らなければ、解決への道が見出せない。言いたくないことかもしれないが教えてくれ」

彼女が僕に視線を向ける。

「いいでしょう。概ねそのとおりです。普齊が言うような事実が起きました。わたしは、拒絶しました。」

それだけです。いまに至るまで乱暴も狼藉ありません。わたしは、最初に言いました。この身に関しては、何ら心配はいらない、見てのとおり無事ですと。その言葉に何らつけ加えるべきはありません。

これでいいですか？」

僕は、安堵の吐息を洩らす。普齊が言葉を継いだ。

「危険ですね。」

パスタリヤ家は以前よりエレミタの存在を知っていた。当然、羅毘童も知っていたのでしよう。宗教界の監督役である彼が自らの管轄するこの島で、エレミタを調査したことがあっても何ら不思議はない。恐らくそのときに墓地の近くどこかで貴方を見初め、宗教家に赦されぬ邪恋を抱いたのでしよう。美しい人は略奪を誘う。そう、無論、貴方の意志にかかわらず、です。

しかし、普通に考えれば、接触の機会は何れも無であつた。認められない存在ではあつても、エレミタ黙認が一応パスタリヤの不文の方針でしたから。

逆上したエンリの訴えは、まさに渡りに船だったというわけです。羅毘童は、それを利用し、遂げられぬ筈の思いを一挙に遂げようと烈情した。

まあ、そんなところでしょうか」

基本的な考えは、僕も同じだった。ただ、彼のように筋立てて考えていなかったただけだ。イイリヤが毅然たる様相を崩さず、普齊を見つめている。彼も尊大な表情を変えなかった。

「それは、憶測です。確かに、彼は、わたしを求めましたが、その感情が以前からあつたかどうかは、彼以外に誰が知り得ましょうか」

「言われるとおりですな。だが、人間は危機を察知し、身を守る気遣いが常に必要です。猜疑しすぎて困ることはない。余計な憶測は必ずなければなりません。」

いずれにせよ、情愛は恐るべきものです。人をして狂わせます。エンリの愚行がよい例でしょう。羅毘童が遂げられぬ想いにどんな過ちを犯すか、予測がつかなくもありません。貴方を冤罪で処刑することさえあり得るのです」

「それで？」イイリヤの眉は微動さえしなかった。「わたしがどうすればよかったと言われるのでしょうか。羅毘童の欲望を憐れみ、彼をこの身に受け入れればよかったのでしょうか。それはできません。」

なぜなら、わたしには、かつて愛する人がいました」

その言葉が僕の心臓を貫く。彼女は、続けた。

「当時、彼への純潔を誓いました。既に別れ、想いを断ち切り、もはや二度と会うまいと決めています。一度、眞實に達した愛は正義です。あのときの誓いは、まだ生きています。そうでなければ、どうして人間同士が信じ合えるでしょうか。」

信じられずして、いかに他者との融合を感じ、心に安らぎを得ましようか。これこそが人の求める畢竟の執著です。

それゆえに無辜の罪で死ぬとしても、致し方ありません」

「イイリヤ、何を言うんだ」僕は、思わず叫んでしまった。静寂。

彼女を眺めたまま黙っていた普齊が言った。

「貴方は罪なくして罪科を問われ、罵られ死ぬるを幸福と言うのか。もしこの偽りの訴えがなければ、貴方は末永く静かに暮らせたかもしれないのに」

それに対するイイリヤの応えは、大地のように揺るぎのないものであった。

「そうです。幸福です。」

この運命がどうあろうと、いま以外はあり得ない。もしも違う選択をしていたら、どうなっていただろう、などと考えるのは、自らの心をいたずらに苛むことでしかない。そのような煩いは、幸福から程遠い。

普齊、わたしは、知っています。

幸福とは、各々の事象を指して言うのではない。幸福とは、幸福へのあこがれのいくらかが、一瞬でも満たされたと感じられることです。ただ、幸福と感じられること、それだけしかあり得ません」

審判所の槍型をした鉄柵の門を出ると夕闇が迫っていた。すべてが一色に染まり、僕も普齊も互いに黙っている。待たせていた馬車に乗り込むと、彼が口を開いた。

「あとは、羅毘童の一週間の行動パターンを詳査し、機会を捉えて暗殺して、正当な裁判を実施してもらう。それしかないな。ぼくの調べた結果が正しければ、審問は二週間後だ。恐らくは確実に訴訟という運びになるだろう。イイリヤが羅毘童の要求を拒否し続けるならば」

必要があれば暗殺すらいとも簡単に口にする実戦的革命家の淡々とした表情に、僕は、驚きもしたが、事実それしかないかとも思う。馬車が動き出したそのとき、審判所の隣にある司教公邸の荘厳な細工装飾の門前で、人だかりがあり、口々に叫んで抗議し、警護兵

と揉めていた。

僕は、目を凝らし、そこにサンディアルゴらの顔を認めた。

「見てくれ。彼らは、エレミタだ。恐らくイイリヤのことで、直截、司教に抗議にきたのだ。大人しい連中も、ようやく行動を起こしたんだ」

普齊が白眼の血管を嘶らかに、栗色の両目を剥く。

「それはまずい。イ多し、彼らを止めねばならない」

僕も洪面を作ってみせ、頷いた。

「そうだな」

だが、彼は、僕の鷹揚な応答を蹴散らす。

「違う、イ多し。君は、解かっていない。これを見れば、心疚しい羅毘童が危惧を抱き、審問の時期を早める可能性が考えられるのだぞ」

皆まで聞かず、僕は、馬車を飛び降りた。

僕と叭羅蜜多と、そして、普齊とは、身体をスライドさせるように横移動して、傍聴席に坐る。イイリヤの公判であるきようは、愚かなエレミタの人々の抗議からわずか三日後であった。

すなわち司教の審問が前々日に行われ、訴訟が決定され、その翌々日には、この裁判の開廷という運びである。異例中の異例と言うべき速さであった。

現在の海鳥島の裁判は、羅教の原典を基礎として法学者らの定めた人定法によって実施される。裁判官は、パスタリヤ家の法務長官に任命された者がなるが、大概、羅教の高僧であり、実質的に司教の配下である。検事も弁護人もなく、陪席に坐る者もない。羅毘童が海鳥島全区の司教として、裁判長及び検事、時には弁護人の役割さえ担う最高主宰者として裁判の全権を司り、頂点に立つのだ。

僕は、きょうに至るまでの日々、司教公邸或いは審判所の襲撃さえ計画した。普齊に悟られ、「無駄死にだ。しかもイイリヤの裁判に決定的影響を与えるぞ」と強く戒められ、断念せざるを得なかった。手をこまねいて無為にこの日を迎えるのは、堪えられない苦痛だった。叭羅蜜多は、「判決には間に合わなくても、執行までには何か手が打てる可能性があるさ」と言った。そうは思えなかった。

僕は、法廷を睨む。

エンリが既に告訴人席にいて、俯き震えて坐っていたが、時々上げるその眼差しは虚ろ

に揺れていた。

「葉だな」

叭羅蜜多が一言放った。

「そう」 普齊も言う。「リザドの商売は手広い。奴らが捕まらないわけだ」

僕は、憤りが猛るのを感じた。どうして罪ある者が人生を享樂し、罪なき者が身を法廷に晒し、死を免れぬ運命に陥らされなければならないのか。

イイリヤが姿を現し、満席の傍聴にざわめきが起る。

四方を華厳で苛烈な龍騎兵に囲まれ、被告席へと導かれる彼女の凜とした態度は、立ち昇る聖火のようであった。その美しさに見とれ、傍聴席から嘆息が洩れる。

髪粉を振った鬘の裁判官がイイリヤ本人であることの確認を終えた。神経質に震える皺だらけの肥大漢、金欄に身を装った羅毘童が立ち上がり、最高壇上に登ると、リボンを解いて羊皮紙に記された罪状文を読み上げた。静寂が覆う。

繁文縟礼な言辞の主旨は、イイリヤが淫欲を抱き複数の男と交わり、良俗壊乱したこと、及びこの世ならぬ快樂を得るために悪魔に魂を売り渡し、挙句の果てに魔物の二つの陰茎によって前後から絶頂を楽しんだという淫魔行罪を犯したこと、これがシルヴィエ聖教という邪教の実態であり、彼らはこの悪魔の教えによって世界を陵辱しようと企んでいる、これを裁かずして羅教の神の正義はなされないという、理性ある人間ならば冗談としか思えない訴えであった。

傍聴席の中から怒号が起こった。憎悪と非難に満ちて、イイリヤを烈しく罵る言葉が場を領する。無実の彼女の心を慮れば、これほど堪え難い屈辱、悔しさがあるとは思えなかった。僕は、憤怒に震え、涙があふれ、齒を喰いしぼる。ここにいる連中全員を殺したかった。この世は不正に満ちている。要領のいい奴や力のある奴だけが善がり、人生を謳歌する。民衆は愚かで、自らの知識を持たず、宗教者や権力者のアジェーション、世間の大勢や報道紙の言いなりで、単純に憎み、哀しみ、憤り、きのうの友もあすには敵と為す。無知とは、最低の罪悪だ。

叭羅蜜多が僕の腕を抑えた。普齊も僕の顔を一瞥する。

裁判官が鎚を打ち、場内を静めると、告訴人エンリに対して、以上相違ないかと確認した。イイリヤは、清冽な眼差しを前に据えたまま、彼の方へは目を向けない。エンリは坐った状態で茫然と顔を上げただけだったが、それが諾という意思表示とされた。

次に裁判官は、イイリヤに弁明を促す。

彼女は、一度、臉を伏せたが、再び眼を漲らせ、強く言った。

「いま述べられたような罪は、一切、わたしにはありません。はっきり否定します。また聖教は、訴えにあるような宗教では、絶対にありません。神がそれを知っています。

けれど、貴方たちにそれを証明するための証拠を、わたしは、一切この地上には持っていません。ただ、わたしや同胞たちの言葉だけです。しかしまた、わたしを訴える言葉も言葉だけでしかありません。いかなる証拠があるのでしょうか」

司祭戎杜羅^{えとら}が挙手し、発言権を求めた。裁判官がそれを認める。司祭が言った。

「それに関しては、我々真教委員会において、いくつかの魔教の儀式に使う道具と薬品とを押収済みです。見てください。これらです。どうでしょうか。いったい、この事実が明らかな物的証拠でない筈があり得るでしょうか」

捏造だ。

イイリヤの凛冽は、変わらなかった。

「それでは、このわたしが魔女だと言われるのでしょうか」

司祭が応えた。

「まだ断定はしない。だが、これらの証拠がそれを暗黙に示唆するのは、衆人の一致する見解であろう」

決然と目を睜^{みは}らせたイイリヤの次の言葉がすべての人々を驚愕させる。

「ならば、この身を炎に焼いてください」

傍聴席や司教司祭、裁判官ら誰もが息を呑んだ。エンリの眼が一瞬、上げられたが、再び遠く曇る。イイリヤは、続けた。

「ご存知のとおり、魔女は火の中でもサランダーのように死ぬことがないと言います。もしそれでこの身が燃え焦^こげて死ぬならば、わたしと聖教との純潔が証を立てられます。わたしの潔白は、必ずや晰^はらかとなります。

わたしが何者をも裏切っていないことが、明晰とされます。わたしをかつて愛し、またいまも愛してくれる人々のために、わたしが信じるに足る者であったことが、判明とされるでしょう。

わたしのために、わたしを火で炙^あってください。

ただ、そのときに、貴方たちの心が良心の呵責に苦しまないことを祈ります。

人は皆、同じように哀れむべき生き物なのです。誰もが同様に不幸なのです。同じ狂気の絡繰りの中を疾駆しているにすぎないのです。願わくば、もうこれ以上、悲しみの上に

悲しみを、苦しみの上に苦しみを重ねることがないことを祈ります。

この法廷にいる人たちの中には、家族を殺戮された者もいるでしょう、罪のない者を殺めた人もいるかもしれません。報復を誓い憎悪に身を滾らせる者も、嫉妬に苛まれいわれなき人々を陥れた人たちもいる筈です。

すべての人間は同じ絡繰りに因って執著し、駆られ、行為するのです。そこからは、誰も逃れられない。だからと言って、それを赦し、人を憎まずにいられるでしょうか。愛する者の死を悼まずにいられるでしょうか。どうしてそんなことができるでしょうか。だから、人は諍いを免れられない。わたしも同じです。

すべての人々が自分や愛する家族、友人らが無事で、心に苦しみのない、悲しみのない、憤りのない、望みや願いが挫かれず、意に違わぬことのない、抗いのない状態を欣求し、狂奔する。だからこそ――

イイリヤが目を閉じ、天を仰ぐ。頭を戻し、屹然と周囲を見回す。その燦めきで射抜くかのように。

「この大地に永遠の平和を。わたしたちすべての者に永遠の平和を。

これこそが生存によって人間に与えられた最大の執著です。これこそが与えられた限りにおいて眞實の要請に最も近い行為、逃れられないわたしたちの為せる限りの最善です。限界の中で得られる、最高の幸福です。

わたしは、いま晰らかに何を為すべきかが覺わかりました。

この身は愛と正義と眞實という諸概念の御名の下に、火炙りにならなければならない。

それが我が身をしてわたしを駆り立てる幸福、可能な限りの最善、生存への執著という、

EXPOSITION
『眞』です」

場内が騒然とする。裁判官も司祭も瞠目したまま、口がふさがらない。僕も叭羅蜜多も、普齊さえ啞然として言うべき言葉を失う。蒼白になりながらも、羅毘童の毗が残忍な喜悅の狂気を帯びる。エンリだけが茫漠として無反応であった。

裁判官が鎚を打つ。

その日の夕刻、僕は、『自由の聖なる海鷲』のアジトの扉を勢いよく開け、いる連中の挨拶にも応えず廊下を闊歩し、武器の収納されている部屋の前に立った。イザスが椅子に坐って、独りで番をしている。僕は、彼を殴って気絶させ、鍵を奪う。武器庫に飛び込んで、ありったけの火器を両腕に抱きかかえた。

イイリヤの判決は有罪。刑は火炙り。あすの午後が執行日とされていた。振り返ると、叭羅蜜多が怒気を孕み、肩で息をして立っている。

「どうするつもりだ、イ多し！」

僕は、彼を見据えた。

「決まっている。襲撃だ。イイリヤをあそこから出す！」

「ばかやろう、できると思うのか。犬死だ！」

「どけ！ どかないなら、おまえを殺してから行く」

「イ多し、イイリヤを殺されたくない気持ちには分かる。だが、俺も同じだ。おまえを殺させたくない！」

双眸に込み上げる涙を感じる。

「では、どうしたらいいんだ、叭羅蜜多！ イイリヤを殺させたくない、彼女が死ぬなんて堪えられない。ユーカも死んだ、父も母も死んだ、どうしたらいいんだ、叭羅蜜多、教えてくれっ。絶対に殺させたくない、死んで欲しくない、このままではイイリヤが炙り殺されてしまうっ！ だめだ、堪えられないっ、絶対にだめだ、どけ、叭羅蜜多」

僕は、ぶっ放した。叭羅蜜多が辛うじて部屋の外へ飛び出す。僕も出た。そして、途端に後頭部に激痛を感じ、意識を失った。多分、イザスが気を戻して、僕を殴ったのだろう。次に瞼を開いたときは、柱に縛られて身動きができなくされていた。

「いま何時だ！」僕は、絶叫した。既に日は高い。叭羅蜜多が坐って僕を眺めていた。

「午前十一時過ぎかな」

イイリヤが殺される！

「お願いだ、叭羅蜜多、イイリヤのところへ連れて行ってくれ、お願いだ、せめて彼女を見たい、お願いだ、叭羅蜜多！」

傍には普齊も立っていた。

「いいでしょう。叭羅蜜多。あとは、イ多しの運命です。」

イイリヤの最後だけでも見せて上げなければ、あまりに残酷でしょう」

処刑は市街のアストーリヤ広場に於いて公開式で執行された。大量の薪と一本の磔棒が立てられた。処刑場の周囲には丸太で格子状の柵が設けられ、アルカサルの民衆やら外国商人やら船乗りやらがその外に群がり、見物するという寸法だ。公開死刑は庶民にとって

御祭りのようなものだった。今朝も早い時間から喧騒状態だったらしい。人々は、美しいと噂されるイイリヤの火炙りを見ようと、興奮状態にあった。

太陽神の御する炎の馬車が蒼穹を駆け上る。

やがて官吏や下役人やらが忙しく準備を始めると、一部の人々が吼えた。「早くしろおつ」僧侶たちが席に並び始める。

壮麗な槍歩兵の列が民衆をかき分け、道を造る。併せて仮設刑場を囲み、妨害に備えた。龍騎兵も現れる。重装歩兵が柵の入口を固めた。

儀仗兵と喇叭隊とが行進する。吹奏とともに、設えられた天幕の中から、儀装した司祭らに囲まれて、羅毘童が現れる。

柵の外に作られた壇上に上がると、群衆を睥睨した。人々が静まる。彼が口上を述べ始めた。

それが終わると、合図をする。

イイリヤが繋がれて現れた。満場の怒声、喝采、嘲笑、罵声の疾風。緋色のマントを羽織った法務長官のピラススが立ち上がり、罪状を読み上げる。パスタリヤ家の家長にして領主のヴィバスが右手を上げた。執行のサインだ。梯子を使って、棒の頂上近くに、抵抗しないイイリヤが縛りつけられる。庶民らの大歓声が上がった。

蒼穹を背景にする彼女。

火が点けられた。

群衆の声は、さらに烈しく、波浪のようにうねる。

巨大な扇風機が運ばれた。いくつも歯車を着けたこの機械は数人の屈強な男たちによって回される。油が撒かれた。扇風で炎が大きく傾く。煙が斜めに流れる。

煙りで窒息死させないための工夫だ。人間は焼かれてもすぐには死ねない。絶命に至るまでは、凄まじい光景が繰り広げられることとなる。

炙られ始めは、もぞもぞ身を動かすだけだった。それでもかなり熱いのを堪えている筈だ。

だが、炎が一m強に近づくと、縛られた足を引き千切ろうとするかのように上下に激しく悶絶した。髪が縮れる。絶叫が上がった。凄絶な表情。

炎がイイリヤの足尖に届く。もはや彼女の動きは常人のものではなかった。気を失う。

熱さで意識を取り戻す。絶叫。意識を失う。再び取り戻す。絶叫。これがいく度もいく度も繰り返された。

人間の光景ではなかった。

踵の肉が焼かれ、骨が露わになる。全身は黒く変色し始める。髪はないも同然。もがき方が身を裂かんばかりで、正気ではなくなっていた。

細胞の塊だ。

レンガ色のスレート屋根を炸^はぜるように、飛沫で煙らせていた。雨樋が氾濫している。テラスの階段は、瀑布のようだった。緑の芝生が折れるほど強い水の粒が襲来している。耳を劈く水音。僕は、ここにすることが了解できなかった。

目の前には、イイリヤがいる。七歳のイイリヤだ。僕らは、白い柵を差し挟んで見つめ合っている。もしも雨の音がなければ、呼吸があたる感触が分かっただろう。僕は、唇の動きを眺めていたようであった。

意識が判然となった。烈しく額を叩く雨滴。睫^{した}から滴る。頬を走る。顎に雫となる。

「イイリヤ」

僕の口からこぼれたその言葉。自分の手が彼女へと差し伸べられた。

イイリヤの指の甲に、指尖が触れる。冷たかった。彼女の四指を強く握った。イイリヤが問いかけるように口を開きかけ、親指で僕の中指の尖を押さえる。言いかけた続きを喋る。

「君のお父さんは、必ず帰ってくる。それを信じて」

イイリヤが俯く。吸り声を上げる。

僕は、眉の震えを、僕自身のその位置で感じた。

「ごめんね、イイリヤ、いままで会えなくて。でも、僕も会いたかった。信じて。どうやっていいのか分からないけれど、会うのが怖かったんだ。

毎日、君のことを考えていたよ、イイリヤ。約束する。これからは、いっしょだ。僕といっしょにお父さんが帰ってくるのを待とう。

イイリヤ、お願いだ、もう泣かないで。僕が君のそばにいる。絶対だ。

もう君から離れないから、イイリヤ、ほんとうだ」

泣きやまない。どうしよう。僕は、顔を覗き込みうとして背を屈めた。髪が垂れて彼女の双眸が見えない。僕は、約束のように、もっと強くイイリヤの手を握る。激しく水滴が

僕の拳を連打する。

「イイリヤ、ねえ、信じて。僕がいる。君のそばから離れない。誓いだ。やくそく」

僕は僕だし、君は君だから、僕らもしかしたら違う場所に別れてしまうときがあるかもしれない。それでも、永遠に、君から離れない。ぜったい遠くにいつても、眞實の僕が君のそばにほんとういる。少しでもいいから、必ず近づく。

やくそく誓いを信じてっ。そうじゃなきゃ、僕ら近くにいても、いつしよになれない。眞實の、ほんとういつしよになれないじゃないか。

イイリヤ、誓いは、永遠に変わらない。そうでしょう？ 眞實の僕らは、ずっとずっとほんとういつしよだ。

イイリヤ、信じて。お願い、もう泣かないでっ」

涙にあふれる晴を上げ、鼻吸り交じりの声で彼女が言う。「イ多し、会いたかったの」
イイリヤの唇が僕の唇に触れた。